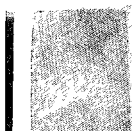


北山廃寺発掘調査報告書

1996年3月

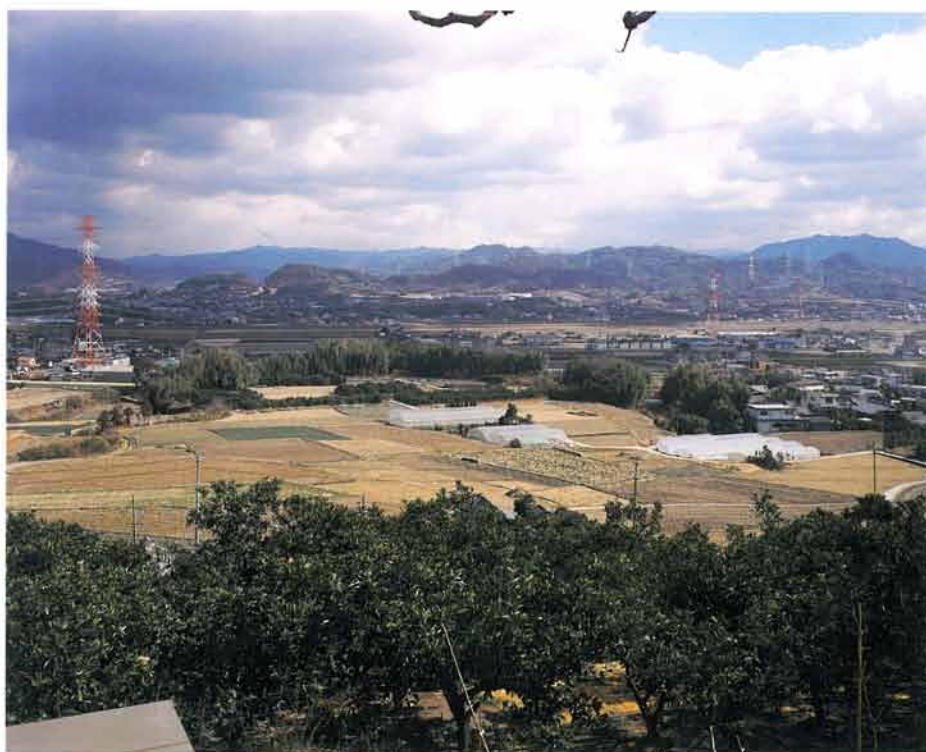
貴志川町教育委員会

財団法人 和歌山県文化財センター





丸田川上空から遺跡を望む



茶屋御殿山から遺跡を望む



北山廃寺塔心礎



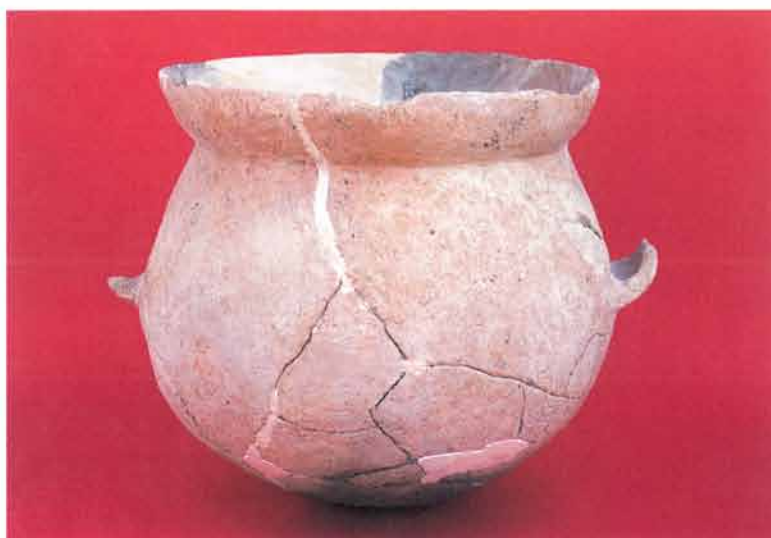
中門推定地瓦溜り



北山廃寺軒丸瓦（A類）



北山廃寺軒丸瓦（B類）



西限の溝（5-SR）出土遺物

序 文

和歌山県那賀郡貴志川町は、和歌山市東部に隣接し、産業は農業中心ですが、近年住宅も多く建築され、人口が増加し、生活の都市化など、まちの姿が変化している町です。

町内には平池遺跡を代表とする先土器・縄文時代遺跡、全国唯一出土の鉄鉢や大型鉄鋌出土で知られる県指定大型円墳の丸山古墳を主とする古墳時代の遺構や遺物、北山廃寺の古代寺院跡、平安・鎌倉時代まで続く岸宮祭祀遺跡等埋蔵文化財の豊富な所です。

北山廃寺跡は貴志川町北山に所在する白鳳時代の寺院跡で、貴志川の支流丸田川北岸の河岸段丘に立地しています。寺域と主要遺構の確認を主な目的として、平成5年度より3か年間に亘り発掘調査を実施しましたところ中門跡、塔跡、金堂跡、講堂跡の遺構が一直線に並び、中門から講堂まで回廊が取り巻く四天王寺式伽藍配置である事がわかり、また寺域も方一町を示す溝跡が発掘され寺域の西限を示す遺構と考えられます。遺物としては単弁八弁蓮華文軒丸瓦、重圈文軒丸瓦、四種類の平瓦、須恵器の高坏、土師器の釜を検出する等、貴重な資料を得ることができ、今後もこれ等文化財の保存に努めたいと思います。

ここに調査の成果をまとめ刊行いたします。本書が皆様方の研究の一助となれば幸甚です。最後になりましたが、調査に当たり種々御指導、御協力頂きました関係各位や地元の皆様方に厚く御礼を申し上げますと共に今後もより一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

貴志川町長 中 村 慎 司

例言 凡例

- 1 本書は、和歌山県教育委員会が平成4年度から三ヶ年国庫補助を受けて「重要遺跡範囲確認調査」として実施した那賀郡貴志川町北山に所在する北山廃寺の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、和歌山県教育委員会が(財)和歌山県文化財センターに委託し、同センターが行なった。
- 3 発掘調査にあたっては北山廃寺発掘調査委員会を組織し、県教育委員会の指導のもと、(財)和歌山県文化財センター主査富加見泰彦が担当した。
- 4 本書の作成は、富加見が行なった。
- 5 発掘調査および報告書作成について下記の方々からご教示を得た。記して感謝の意を表します。
岡田茂男（奈良大学） 亀田修一（岡山理科大学）、仮屋喜一郎（泉南市教育委員会） 積山洋（財団法人大阪市文化財協会） 駒井正明（財団法人大阪府文化財調査研究センター） 藤沢典彦（財団法人元興寺文化財研究所） 森郁夫（京都国立博物館・現帝塚山大学） 前田敬彦（和歌山市教育委員会） 三辻利一（奈良教育大学）
- 6 出土遺物の理科学的分析は奈良教育大学三辻利一先生に依頼し、玉稿をいただいた。
- 7 遺構写真は担当者が撮影したが、その一部と遺物写真については加茂幸彦氏に協力いただいた。
- 8 本書で使用した遺構の略号は以下の通りである。
S B－掘立柱建物 S X－墓 S D－溝状遺構 S F－柱列 柱穴－S P
- 9 本書の遺構図の方位は国土座標第Ⅵ系を使用し、標高は東京湾標準潮位（T. P）で表している。
- 10 各遺構の縮尺は原則として1／100に統一しているが、そうでないものもある。遺物は土器類および軒丸瓦は1／3、平瓦、丸瓦は1／5に統一している。
- 11 遺物の番号は1からの通し番号とし、写真番号とは一致するようにしている。
- 12 本書における調査記録（遺構実測図、遺物実測図、遺構写真、遺物写真）については(財)和歌山県センターが保管し、出土遺物は貴志川町教育委員会が保管している。
- 13 調査にあたっては、地元北山地区 並びに調査をご快承いただいた土地所有者の方々に心から感謝申し上げる次第です。

調査の組織

北山廃寺調査委員会

委員長	南出日佐光	貴志川町文化財保護委員長			
副委員長	田村国彦	貴志川町文化財保護委員			
委員	森本芳明	貴志川町文化財保護委員	委員	田村 進	前・北山自治区長
	嶋本清三	貴志川町文化財保護委員		中西隆夫	前・北山副区長
	吉田尊彦	貴志川町文化財保護委員		田村芳巳	前・北山会計
	阪上貫一	貴志川町文化財保護委員		北山武夫	元・北山自治区長
	西川定義	貴志川町文化財保護委員		栗本末雄	元・北山副区長
	児玉順彦	貴志川町文化財保護委員		藤木 勉	農業委員
	北山 広	北山自治区長（代表区長）		田村多佐雄	元・丸栖代表区長
	田村豊和	北山副自治区長		谷口一夫	元・丸栖代表区長
	上田達雄	北山自治区会計			

事務局

事務局長	的場範夫	貴志川町教育長
事務局次長	阪中 博	貴志川町教育委員会生涯学習課長
事務局員	東 秀明	貴志川町教育委員会生涯学習課主幹
	小西晴久	貴志川町教育委員会生涯学習課主事
	児玉順彦	貴志川町教育委員会生涯学習課

(財)和歌山県文化財センター

調査委員	岡田英男（奈良大学教授）
	羯磨正信（和歌山県文化財保護審議会委員）
	巽 三郎（和歌山県文化財保護審議会委員）
	藤沢一夫（帝塚山大学客員教授）
	森 郁夫（帝塚山大学教授）
事務局長	鍋島伊都夫（平成6～7年度）
	中谷博昭（平成8年度～）
次長	菅原正明
埋蔵文化財課長	松田正昭
管理課長	西本悦子
主事	森 和美
〃	松尾克人
主査	富加見泰彦（調査担当）

目 次

序文	E・回廊	13
例言凡例	F・四至	15
調査の組織	西限の溝	
第I章 調査の経緯	東限	
第II章 位置と環境	G・その他の遺構	16
第III章 調査の方法と経過	第2節 遺物	18
第IV章 調査の成果	土器	18
第1節 遺構	瓦類 軒丸瓦	22
A・塔跡	平瓦	26
B・金堂	丸瓦	26
C・講堂	第V章 分析	40
D・中門	第VI章 まとめ	45

表 目 次

第1表 軒丸瓦計測表	第4表 丸瓦計測表	36
第2表 平瓦計測表	第5表 分析値	42
第3表 平瓦各類の比較		

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1/2500)	第16図 軒丸瓦拓影・実測図	
第2図 旧街道と古代寺院	(2)(1/3)	22
第3図 紀伊の古代寺院出土軒瓦(1)	第17図 軒丸瓦拓影・実測図	
第4図 紀伊の古代寺院出土軒瓦(2)	(3)(1/3)	23
第5図 調査地点位置図	第18図 平瓦拓影・実測図	
第6図 塔跡実測図 (1/100)	(1)(1/5)	25
第7図 塔心礎実測図 (1/20)	第19図 平瓦拓影・実測図	
第8図 北山廃寺全体図	(2)(1/5)	26
(1/800)	第20図 平瓦拓影・実測図	
第9図 講堂跡・回廊跡推定地実測図	(3)(1/5)	27
(1/100)	第21図 平瓦拓影・実測図	
第10図 中門跡推定地および瓦溜まり	(4)(1/5)	28
(1/100)	第22図 平瓦拓影・実測図	
第11図 回廊跡実測図 (1/100)	(5)(1/5)	29
第12図 西限の溝実測図 (1/50)	第23図 平瓦拓影・実測図	
第13図 第12調査区遺構平面図	(6)(1/5)	30
(1/100)	第24図 平瓦拓影・実測図	
第14図 第15調査区遺構平面図	(7)(1/5)	31
(1/100)	第25図 平瓦拓影・実測図	
第15図 軒丸瓦拓影・実測図	(8)(1/5)	32
(1)(1/3)		

第26図 平瓦拓影・実測図	
(9) (1 / 5)	33
第27図 丸瓦拓影・実測図	
(1) (1 / 5)	34
第28図 丸瓦拓影・実測図	
(2) (1 / 5)	35

第29図 平瓦比較図	36
第30図 土器実測図 (1)	37
第31図 土器実測図 (2)	38
第32図 土器実測図 (3)	39
第33図 奈良時代須恵器・瓦類胎土分析	43

図版目次

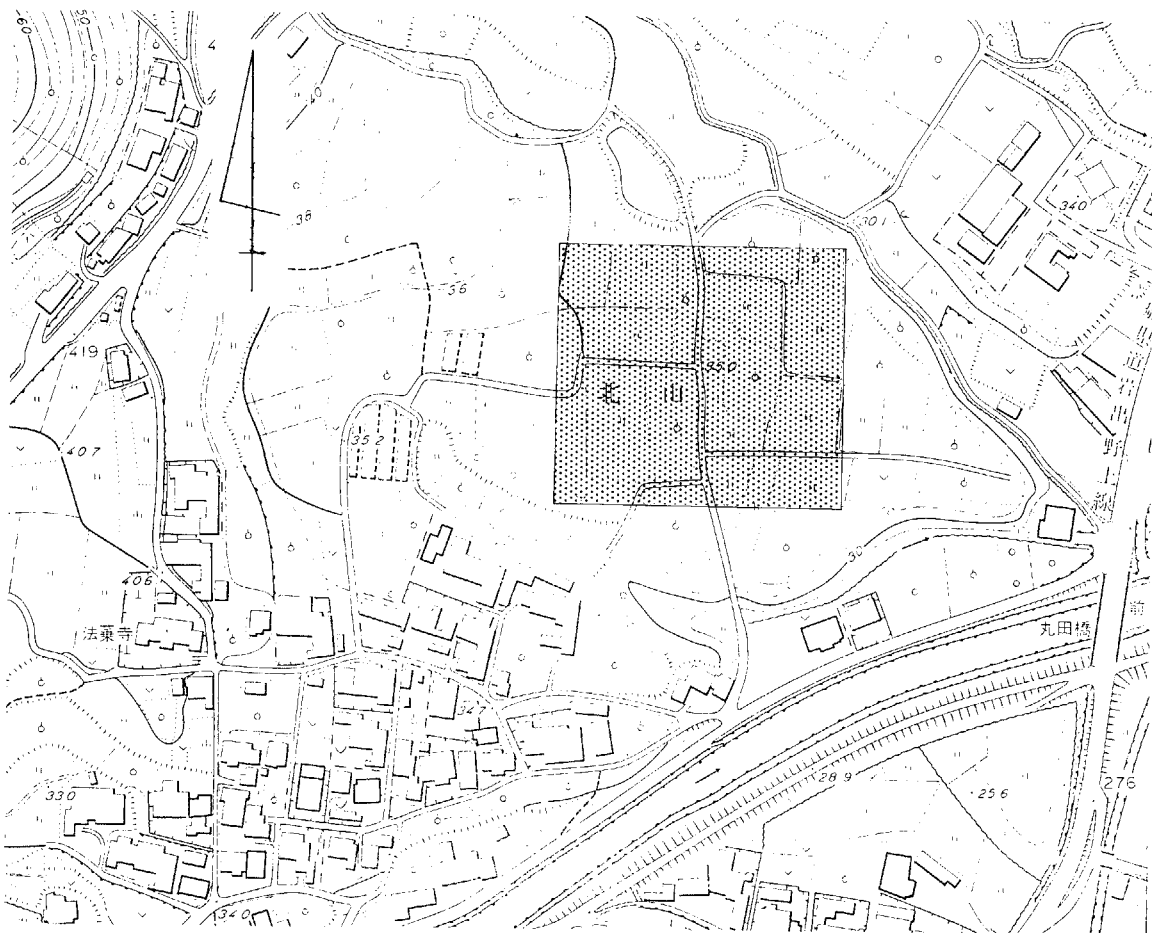
巻頭図版 1	丸田川上空から遺跡を望む 茶屋御殿山から遺跡を望む		
巻頭図版 2	北山廃寺塔心礎 中門推定地瓦溜まり		
巻頭図版 3	北山廃寺軒丸瓦 (A類) 北山廃寺軒丸瓦 (B類)		
巻頭図版 4	北山廃寺赤焼け平瓦 北山廃寺出土土器		
P L 1	北山廃寺全景 (北から) 塔基壇の調査 (南から) 塔心礎検出状況 (西から)		
P L 2	塔北側基壇縁検出状況 (南から) 金堂跡南側基壇縁検出状況 講堂跡、坊舎跡推定地の調査		
P L 3	講堂跡推定地雨落ち溝 (18-S D) 検出状況 同・遺物検出状況 (南から) 同・土層断面 (西から)		
P L 4	回廊北西隅検出状況 (南から) 同・北から 西回廊推定地の調査 (東から)		
P L 5	西回廊推定地の調査 (南から) 中門推定地瓦溜まり検出状況 (東から) 中門跡推定地瓦溜まり検出状況 (北から)		
P L 6	中門跡推定地 (東から) 中門推定地掘立柱列 (201-S F) 検出状況 (東から) 中門東側 (302-S D) 検出状況		
P L 7	西回廊検出状況 (南から) 同・瓦検出状況 (南から) 西回廊検出状況 (南から)		
P L 8	西回廊検出状況 (東から) 西回廊瓦検出状況 (西から) 西回廊瓦検出状況 (東から)		
P L 9	西回廊南西隅検出状況 (南から) 西限の溝 (5-S D) 検出状況		
	西限の溝 (5-S D) 遺物出土状 況		
P L 10	西限の溝 (5-S D) 検出状況 西限の溝 (5-S D) 遺物出土状 態 西限の溝 (5-S D) 検出状況		
P L 11	第12トレンチ遺構検出状況 第12トレンチ213-S B 第15トレンチ212-S B		
P L 12	3-S X 中世墓 第31トレンチ中世柱跡群 第 調査区中世遺構群		
P L 13	軒丸瓦A類 A類 B類		
P L 14	軒丸瓦A類 A類 C類		
P L 15	平 瓦A類 " "		
P L 16	平 瓦B類 平 瓦B類 平 瓦C類		
P L 17	平 瓦C類 平 瓦D類 平 瓦E類		
P L 18	丸 瓦		
P L 19	軒丸瓦D類、土器類 (1)		
P L 20	土器類 (2)		

第Ⅰ章 調査の経緯

経緯 北山廃寺は、那賀郡貴志川町北山字三鳴に所在する白鳳期の古代寺院である。廃寺は、一級河川紀ノ川の支流である貴志川のさらに一支流丸田川の河岸段丘に立地している。

広大な面積を有する寺院跡は、近年開発の波が押し寄せ虫喰いの状態に陥っているのが現状である。このような宅地開発が進む現状のなかで、北山廃寺は周囲が全て田畑で県下で最も保存状態が良いと考えられている寺院跡である。そのため、今後の保存活用をより円滑に推進させるための基礎資料の必要性から寺域と主要遺構の確認を主目的とし、平成5年度から平成7年度まで国庫補助事業として3か年の計画で確認調査を実施することとなった。

調査は、現存する塔跡心礎を中心として東西200m、南北150mの台地上にトレンチを設け、伽藍の検出と寺域の確認に重点を置いた。遺構が検出された場合、拡張することによって遺構の性格を把握することにした。



第1図 遺跡の位置

第II章 位置と環境

位 置 北山廃寺は和歌山県那賀郡貴志川町北山字三嶋に所在する白鳳時代の寺院跡である。貴志川町は、和歌山県の北部、那賀郡の南西部に位置している。町域は紀ノ川の支流である貴志川の両岸に発展した町で、北は茶屋御殿を最高点とする鳩羽山に、南は山田川を境として野上町、海南市に、東は貴志川を境として桃山町と接する。

廃寺は、鳩羽山から東に張り出した丘陵の一角に位置し、前面に貴志川とその氾濫原が一望できる河岸段丘上に立地している。標高は34m前後で、貴志川の氾濫原とは約6mの比高差がある。

環 境 (第2.3図)

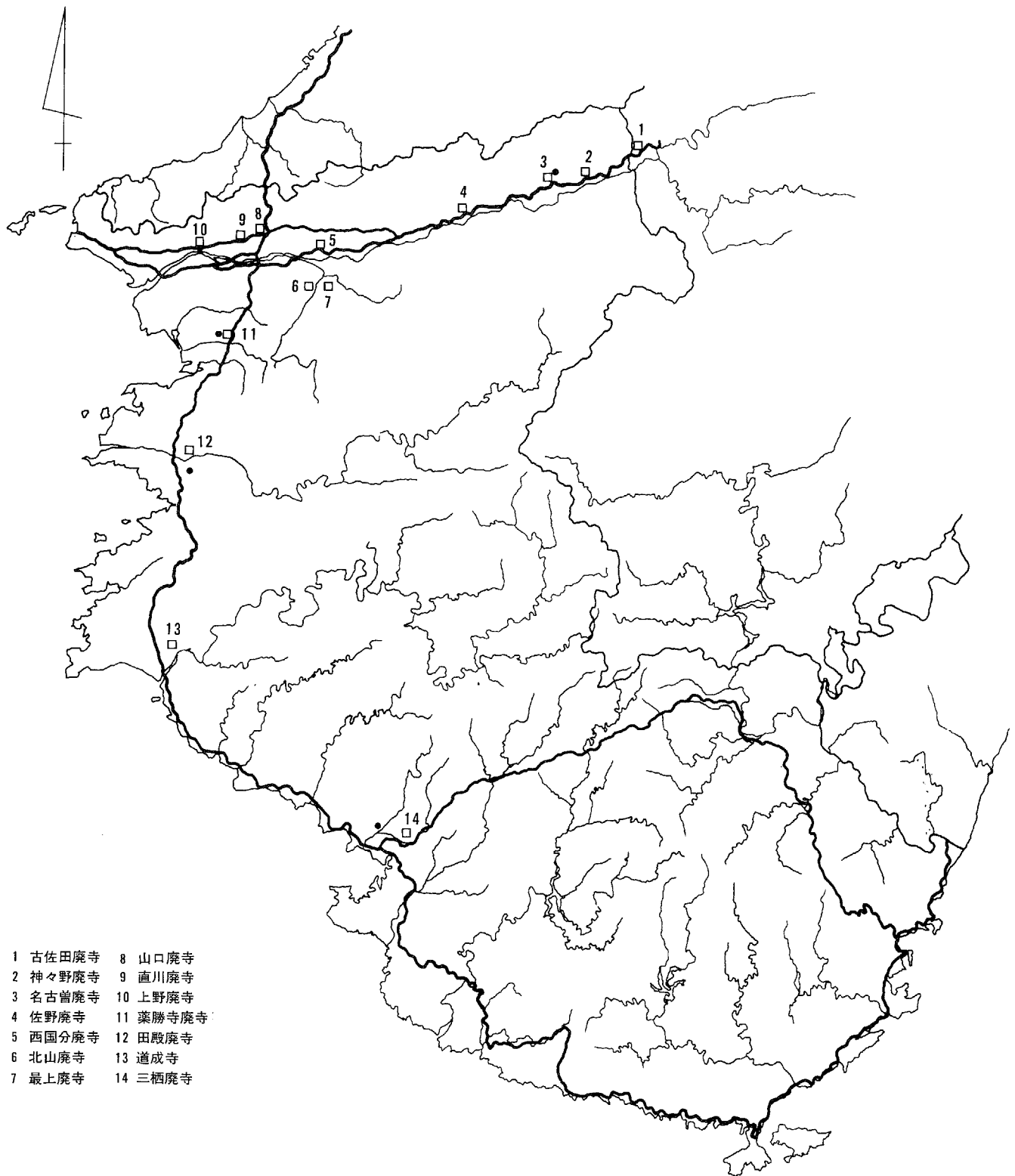
先土器時代 貴志川町域は紀北筋にあっては、濃厚な遺跡分布を示している。特に大池と平池周辺に集中する傾向が看取され、前者の遺跡としては大池南岸遺跡、大池北岸遺跡、尺谷池遺跡が存在し、後者には平池西方遺跡、平池南岸遺跡、平池北岸遺跡が存在する。調査が行なわれたことがないので詳細は不明で、表採資料等では主にナイフ型石器が多いようである。

縄文時代 前述の大池南岸遺跡、尺谷遺跡等でサヌカイト製の石鏃が多数採集され、前時代と遺跡が重複することが知られている程度で遺跡の実態把握には至っていない。周辺の遺跡としては貴志川上流の河岸段丘に展開された溝ノ口遺跡が県下では著名な集落遺跡で後期を中心として晩期に及ぶ大集落であることが知られている。

弥生時代 弥生時代の遺跡も十分把握されているとは言えない。貴志川右岸の河岸段丘上に立地する楠田遺跡が知られている程度である。楠田遺跡は「町史」編纂事業として確認調査が行なわれている。それによると、弥生中期～後期にかけての集落址であることが確認されているが、全体像の把握にはいたっていない。

古墳時代 集落址は、貴志川左岸の氾濫原から低位段丘にかけて、前田遺跡、神戸遺跡が存在するが実態は不明である。表採されている遺物で判断するかぎり現状では6世紀を遡る遺物は発見されていないが、5世紀代にすでに大型古墳の築造が顕著であることからすると、今後発見される可能性は高く期待が持たれる。集落址に比べ古墳の存在は顕著で、5世紀になると前述のように貴志川左岸の段丘上に、丸山古墳(40m)、罐子塚古墳(40m)、三昧塚古墳(40m)といった大型の円墳が築造される。

丸山古墳からは甲冑一組、鉄製鉢、直刀約60口、刀子、鉄廷、玉類、琴似形石製品、円筒埴輪が出土し、前方後円墳の副葬品と遜色ない内容を誇っている。罐子塚古墳からは鉄製馬具、鉄鏃、挂甲の小札、滑石製の紡垂車、須恵器片が出土している。埋葬施設は粘土槨の可能性が高い。三昧塚古墳からは円筒埴輪、形象埴輪が出土したのみで不明な点が多い。結晶片岩の板石が確認されていることから埋葬施設は丸山古墳同様、箱式石棺の可能性が高い。これら古墳の築造時期は



第2図 旧街道と古代寺院

おおむね丸山古墳→罐子塚→三味塚の順となる。前方後円墳は6世紀後半になって、平池周辺に築造されるようになる。平池1号墳、双子三味塚古墳がそれで、やがてこの前方後円墳も船戸箱山古墳にみられるような方墳へと首長クラスの古墳の墳形が変化する。貴志川右岸では6世紀後半になって北古墳群、高尾山古墳群に石棚を持つ古墳が築造される。これは岩橋千塚古墳群の天

王塚構築をピークとしてその後各地に同様の石室が造られるようになる現象と符号する。6世紀末～7世紀にかけては前述の茶屋御殿山を最高点とする鳩羽山丘陵には具足壺古墳群、七つ塚古墳群といった終末期の古墳が相次いで築造される。これら古墳群は時期、廃寺との位置関係から推察して北山廃寺造営に深く関与した集団の古墳群であると考えられる。

飛鳥・奈良時代（第2, 3, 4図）『日本書記』の大化元年（645）によれば、「天皇より伴造にいたるまで、造るところの寺、造ること能はずは朕皆助け作らん」と大和の有力氏族や地方の郡司級氏族に氏寺造営の奨励と援助が約束された。この詔によって7世紀後半以降8世紀にかけて盛んに氏寺が建立されるようになり、とりわけ先進地域では郡以下の郷単位にまで造寺活動が盛んに行なわれる。伽藍配置においても中央と同じ形態を示すものが存在し、造寺活動における高い企画性が看取される。都に近い紀伊もこの動きに敏感に反応を示し7世紀後半から8世紀初頭にかけて栄んに寺院が建立される。紀伊の寺院は概ね南海道に沿って建立されたものが大多数で、地方の伽藍配置に多いといわれる法起寺の配置を備えたものが多いことがこれまでの調査で明らかとなっている。

紀伊の寺院は出土する軒瓦の文様構成によって川原寺系、坂田寺、本薬師寺系、法隆寺西院系、巨勢寺系にグルーピングがなされることはこれまでの研究によって明らかにされている。

坂田寺系 （西国分廃寺、最上廃寺、北山廃寺）

川原寺系 （神野々廃寺、名古曾廃寺、佐野廃寺、薬勝寺廃寺、田殿廃寺、道成寺、三栖廃寺）

本薬師寺系 （神野々廃寺、名古曾廃寺、佐野廃寺、西国分廃寺）

法隆寺西院系（上野廃寺、山口廃寺、直川廃寺、西国分廃寺、太田黒田遺跡）

巨勢寺系 （佐野廃寺、道成寺、三栖廃寺）

さらにこれら白鳳寺院の分布を『和名抄』にみえる郷名と割り合いを比較すれば

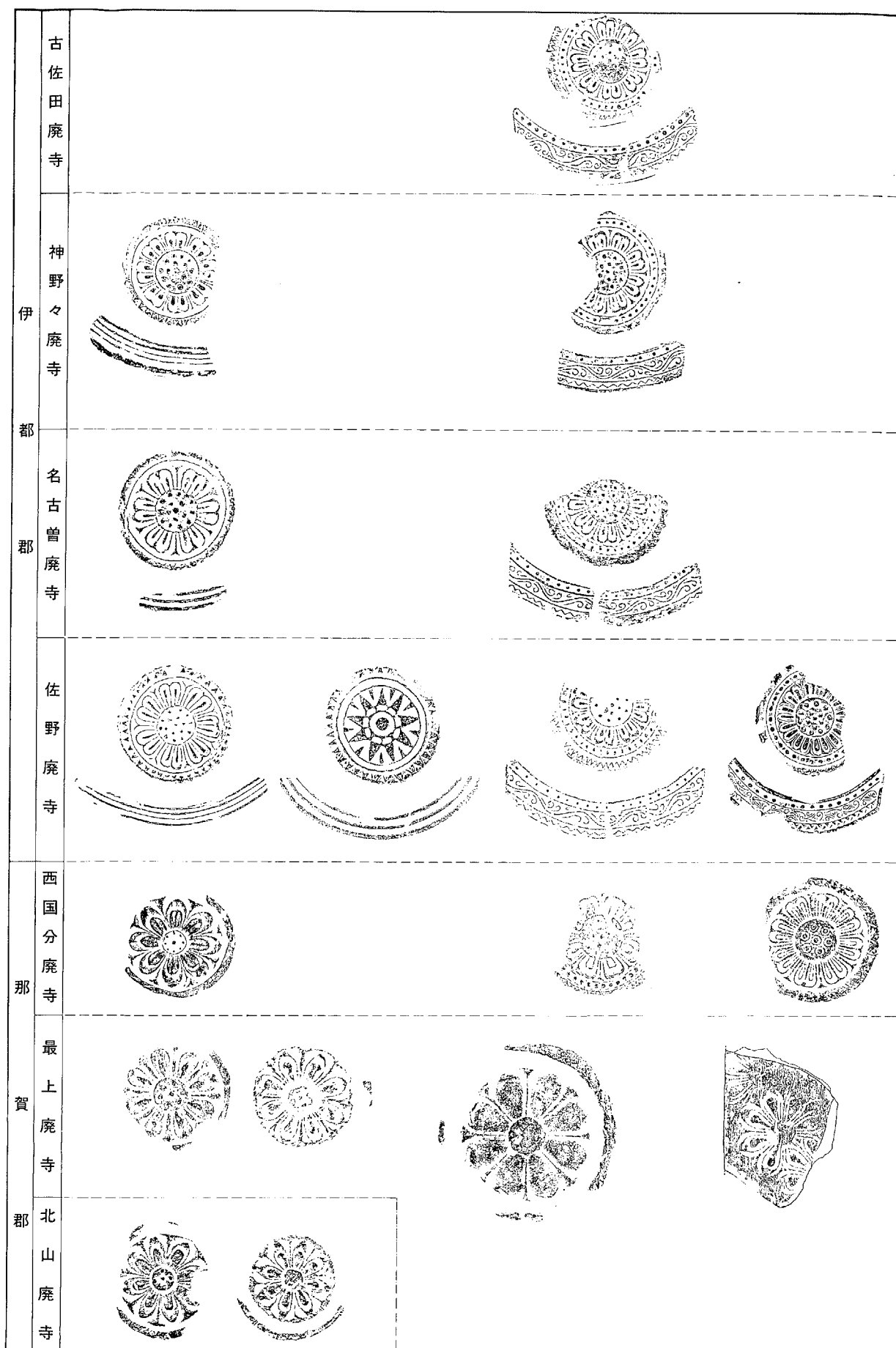
伊都郡 郷4 寺院4（1：1） 那賀郡 郷6 寺院3（2：1） 名草郡 郷11 寺院4（2.75：1）

海部郡 郷2 寺院0 在田郡 郷4 寺院1（4：1） 日高郡 郷5 寺院1（5：1）

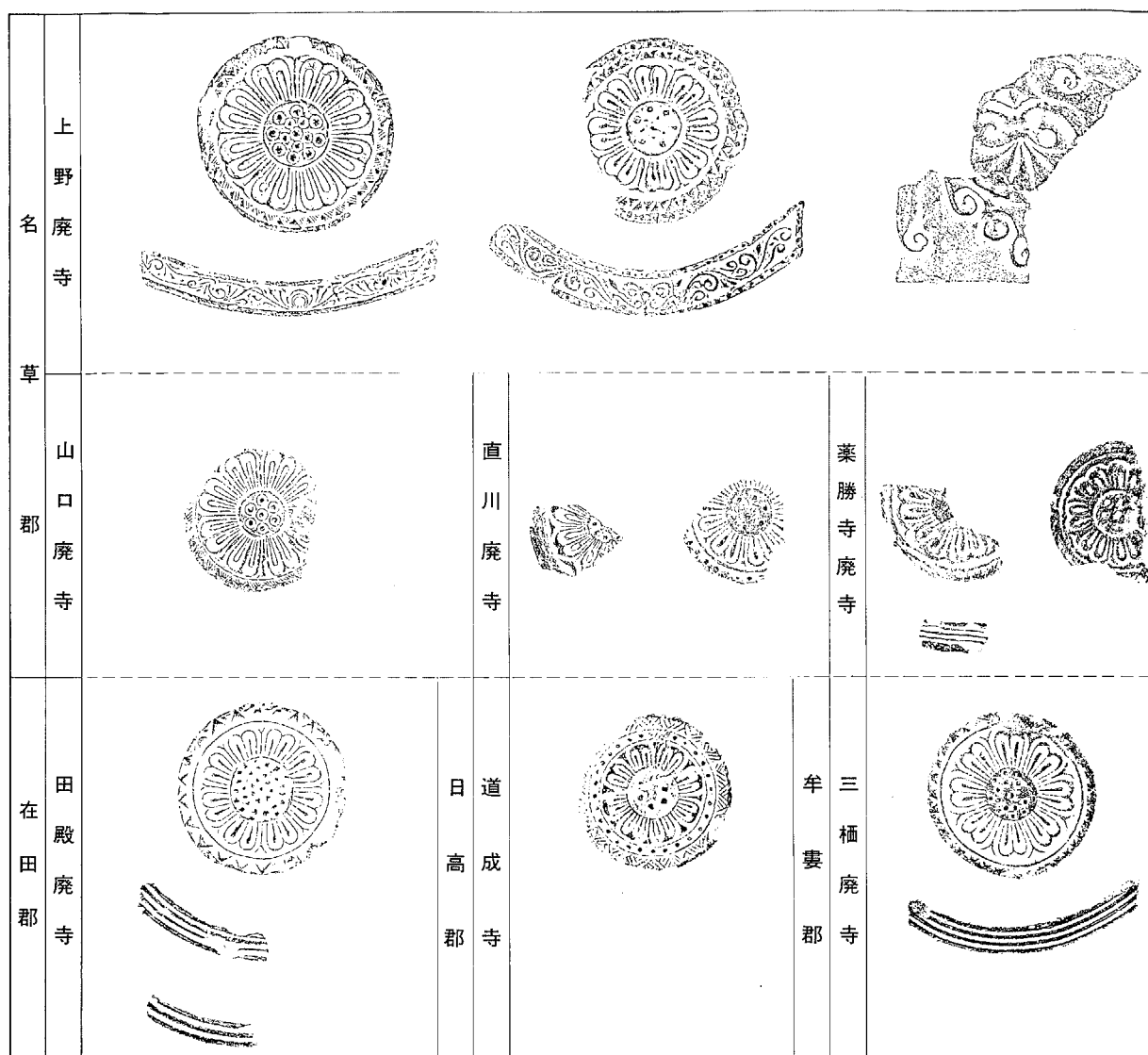
牟婁郡 郷4 寺院1（4：1）

上記のことから南海道沿いの伊都・那賀・名草の各郡は寺院の分布が高く、いわゆる畿内に近い郡程1郷1寺院の形態に近いことが看取される。在田、日高、牟婁郡については一郡に1寺院の形態であることも合せて読み取れる。おそらく中央に深い繋がり、あるいは精通した有力氏族は南海道沿いに蟠踞していたことを如実に示しているであろう。

このうち、那賀郡は後に紀伊国分寺が造営される土地柄で当時はおそらく紀伊の中心地であったと考えられる。白鳳時代には岩出町西国分に西国分廃寺、桃山町最上には最上廃寺そして貴志川町に北山廃寺の3ヶ寺が建立され、これら白鳳寺院は坂田寺系の単弁の軒瓦を有していること



第3図 紀伊の古代寺院出土軒瓦(1)



第4図 紀伊の古代寺院出土軒瓦（2）

も証左の一つである。

これら寺院建立に深く関わったとみられる集落址は、西国分廃寺に対して岡田遺跡、最上廃寺に対して最上遺跡が挙げられるが、北山廃寺についてはいまのところ判然としない。今後の検討課題である。

平安時代 北山廃寺の西*kmの鳩羽山山麓に宗教遺跡としては県内屈指の内容を持つ岸宮祭祀遺跡が所在する。この遺跡は鳩羽山山頂近くに「たてり岩」と呼ばれる巨石があり、山麓の岸宮八幡宮までのが祭祀の場として展開されている。この遺跡はふるくから知られているとみえ、岸宮八幡宮に関する記載は『紀伊続風土記』によると康平6年（1063）にみえる。主な遺構としては環状配石遺構、井戸があり、遺物では鏡、銅鈴、無数の土師器片等が出土している。主体は平安～鎌倉にかけてとみられるが奈良期の遺物も含まれており、北山廃寺との関連も今後解明しなければならない問題の一つである。

第Ⅲ章 調査の方法と経過

方法 これまでに塔心礎の位置のみが判明していた以外、他の主要伽藍および寺域についてのデータが皆無であったため初年度は主要伽藍の確認と寺域の範囲確認にその重点を置いた。調査する果樹園、田畑には便宜上略号を冠し、それを地区名としている（第5図）。

初年度の調査

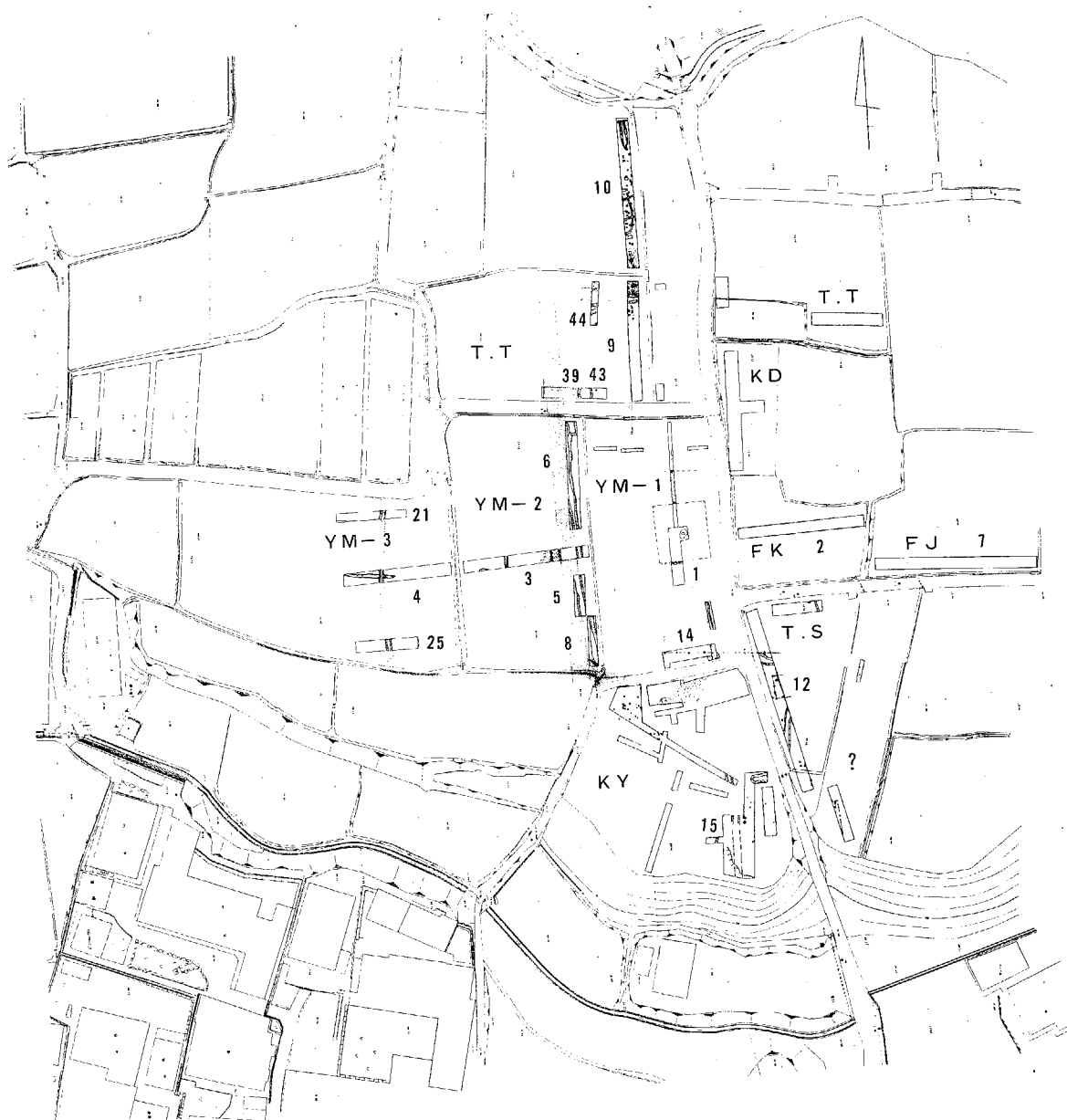
調査は塔跡を中心としてYM-1・2・3区、FK区、FJ区、TT区について行なった。塔心礎は原位置を保全していると考えられたので心礎のほぞ穴を起点として磁石を用い真北を割り出し、任意に調査区の割り付けを行なった。方位はそれぞれ東西南北をE、W、S、Nであらわしアルファベットに続く算用数字は起点からの距離を表している。したがって遺物の取り上げはすべてこの割り付けによる。遺構についても実測はこれに基づいているが、最終的には国土座標第6系に取り込めるようにしている。ちなみに塔心礎の座標値はx-196693.405、y-62511.792である。調査は幅2mのトレンチを設定し、まず主要伽藍を確認する方法を用いた。調査対象区は、建物等の構築物がないものの、大半が果樹畑であり地主の多大な協力はあったが実際にはトレンチの設定については任意とならざるをえなかった。初年度の調査は1～10トレンチを設定し行なった。

主な遺構は以下の通り。

トレンチNo. 検出した遺構	
1 塔心礎、塔基壇	3 回廊、瓦溜まり
4 奈良時代の南北溝	5 回廊と南北の溝
6 南北の溝	8 南北の溝
9 瓦溜まり	10 瓦溜まり 柱跡群

2年目の調査は、塔跡以外の主要伽藍が確認されなかったので引き続いてその確認と門跡に重点を置いた。調査は11～33トレンチを設定しおこなった。

トレンチNo. 検出した遺構	
12 奈良時代の東西方向の溝、建物、中世の南北方向溝	
13 瓦溜まり	14 溝掘立柱列、溝、瓦溜まり
15 掘立柱建物	17 瓦溜まり
21 南北方向の溝	22 塔基壇縁、金堂基壇縁、瓦溜まり
25 南北方向の溝	31 南北方向の溝



第5図 調査地点位置図

3年目の調査は主要伽藍（講堂）の確認と回廊について行なった。調査は35～44トレンチと17.31トレンチの拡張区である。

トレンチNo. 検出した遺構	
36 瓦溜まり、土坑、溝	37 南北方向の溝
43 瓦溜まり	44 溝2条、瓦溜まり

以上の結果を踏まえ、最重要地点についてトレンチを拡張して遺構の把握につとめた。

第IV章 調査の成果

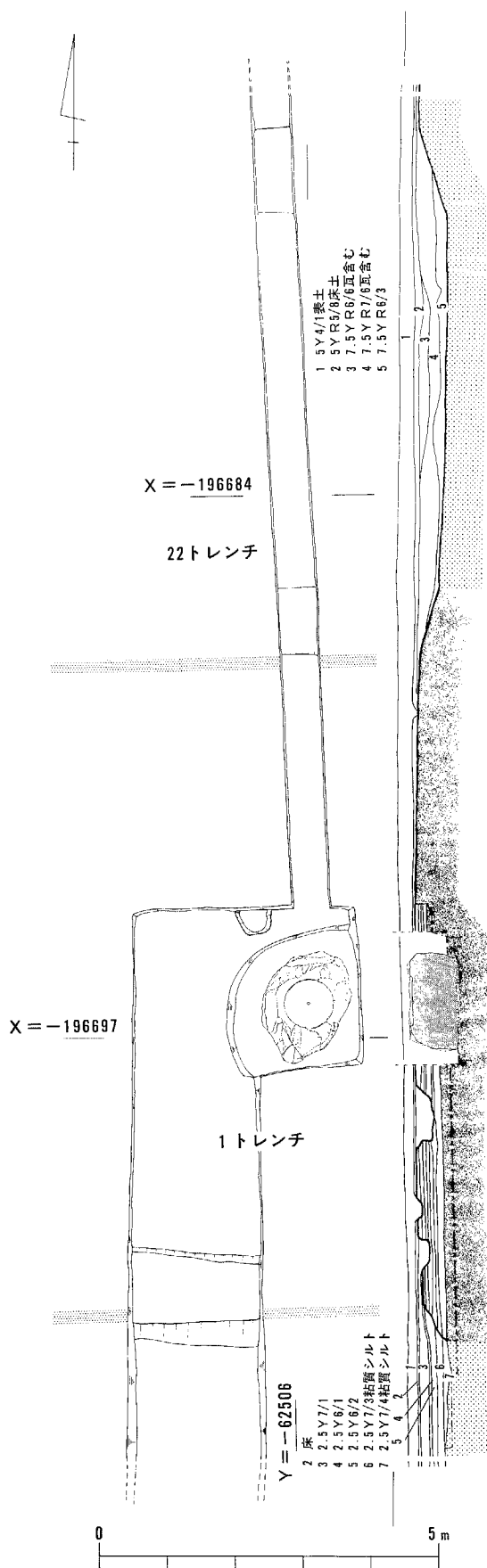
1 遺構

塔跡（第6～8図、PL-1、2上）

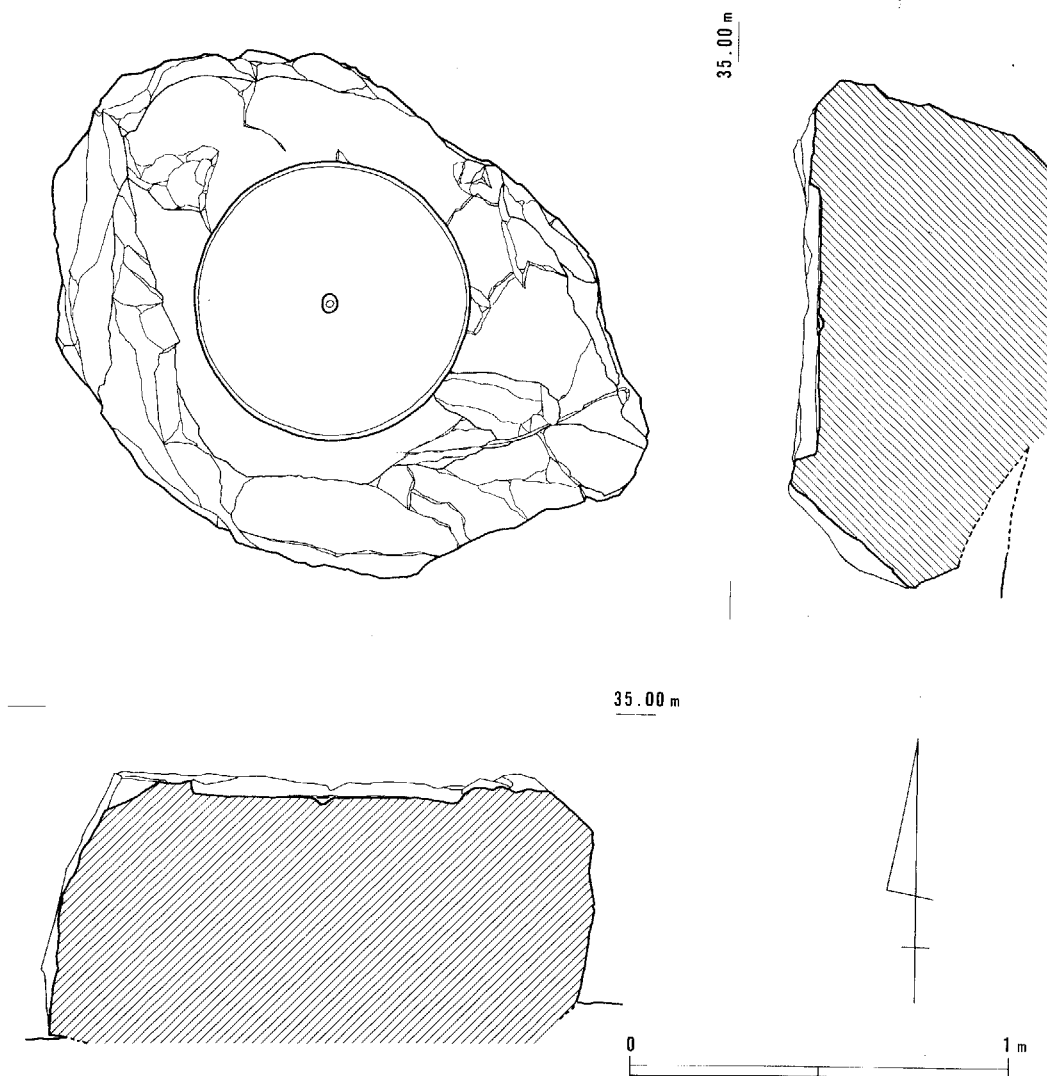
塔跡はこれまでの聞き取り調査で位置を確認できたため容易に検出することができた。基壇は、1、22トレンチの調査結果から真北を向いた一辺10m前後の規模を有していることを確認した。基壇はかなり削平を受けていると考えられ、塔心礎は現存するものの、塔を構成する他の礎石はすでになく据えた痕跡さえも消失している状況であった。心礎だけは半地下式であったため消失をまぬがれたと考えられる。基壇縁には埴、川原石等による化粧等の痕跡は調査の範囲では確認できなかった。本来は地山に必要な面積の土坑を掘り込み、粘土と砂を交互に築き固める工法（掘り込み地業）を行なうが明瞭な痕跡を確認するには至っていない。基壇は10R5/6の地山面に直接2.5Y7/6の細砂と2.5Y6/3粘土とを互層に築き固め、堅固に基壇を築いている。版築によって、築き固められた各層の層厚は3～7cmで10層が観察できる。

心礎はその周りがかつての調査で掘られているため、版築の過程で据えたものかあるいは版築後に土坑を穿ち、据えたものかは明らかにすることはできなかった。

心礎の規模は1.7m×1.18mで、ややいびつな楕円形を呈している。厚みは約0.7mである。心礎の中央には径0.72m、深さ7cmの円形の柱座が掘りくぼめられ、さらに中心には径5cm、深さ1.5cmのほぞ穴が穿たれている。心礎



第6図 塔跡実測図（1／100）



第7図 塔心礎実測図（1／20）

の側面等の観察からも埋納容器などを納める孔は認められない。石材は紀ノ川左岸で産する通称「青石」と呼ばれる結晶片岩を使用している。紀ノ川水系に見られる白鳳時代の寺院は一部の例外を除いて大多数がこの石材を使用している。那賀郡の西国分廃寺、最上廃寺も同様である。西国分廃寺では心礎を据える際、4個の石を配し、心礎をその上に設置し安定させ、最上では小さな栗石程度が僅かに確認できた程度で、北山廃寺の心礎も最上廃寺同様僅かばかりの栗石が認められたに過ぎない。

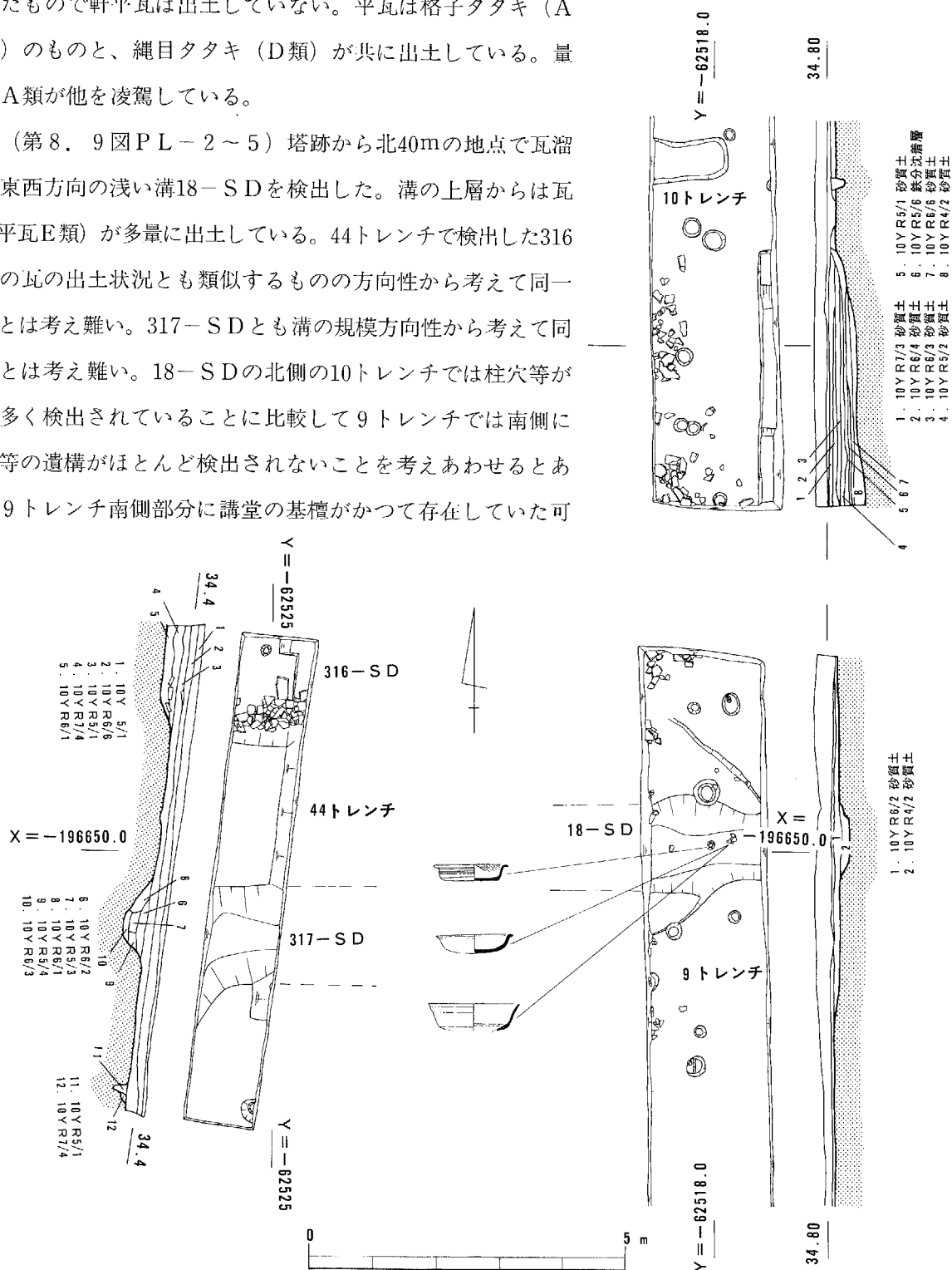
金堂跡（第6．8図P L－2中）塔跡の北側に南北に設定した22トレンチで約7 mの間隔を持って2ヶ所の瓦溜まりを検出した。2ヶ所の瓦溜まりのうち、南側の瓦溜まりはその位置関係と検出した法面は、塔跡に伴なう瓦溜まりと基壇縁であることが明らかとなった。北側の瓦溜まりは、塔跡の東側で金堂跡が検出できなかったことと、塔の西側で検出した回廊跡の痕跡から塔と回廊



第8図 北山廃寺全体図(1/800)

の間に金堂が配置される空間が確保できないことを根拠として、この瓦溜まりを金堂跡の南面に伴うものと推定した。規模については西側では確認できず、北・東側は、共に現里道の下に埋没していると考えられるため明らかにできなかった。北側瓦溜まりから出土した軒丸瓦はA類と分類したもので軒平瓦は出土していない。平瓦は格子タタキ（A、C類）のものと、縄目タタキ（D類）が共に出土している。量的にはA類が他を凌駕している。

講堂跡（第8、9図PL-2～5）塔跡から北40mの地点で瓦溜まりと東西方向の浅い溝18-SDを検出した。溝の上層からは瓦（主に平瓦E類）が多量に出土している。44トレンチで検出した316-SDの瓦の出土状況とも類似するものの方向性から考えて同一の遺構とは考え難い。317-SDとも溝の規模方向性から考えて同一遺構とは考え難い。18-SDの北側の10トレンチでは柱穴等が比較的多く検出されていることに比較して9トレンチでは南側には柱穴等の遺構がほとんど検出されないことを考えあわせるとあるいは9トレンチ南側部分に講堂の基壇がかつて存在していた可



第9図 講堂・回廊実測図（1／100）

能性もあるが今回の調査だけでは十分といえず結論は留保しておきたい。

門跡（第10図P L-5, 6）塔跡の南に小字名で「大門」という地名が現存している。この位置にトレンチを設定したところ広い範囲で瓦溜まりを検出した。現存する地名と塔跡との位置関係から考えて中門跡か大門跡に伴う瓦溜まりの可能性が高いと考えられる。検出した瓦溜まりは



第10図 中門跡推定地および瓦溜まり (1/100)

完形に近い瓦が比較的規則正しい状態で検出されたことから存在していた建物がそのまま倒壊した状況を示していると思われる。しかしながら門跡の基壇については確認できず、すでに削平を受けている可能性もあるが、現有の里道の下に存在している可能性もある。軒丸瓦は坂田寺系の単弁八葉蓮花文（北山B類）と平城宮式の重圈文軒丸瓦（北山C類）が出土し、珍しい遺物として瓦塔の破片が一片、瓦溜まりから出土している。平瓦は桶巻き造りによるA、B、C類の瓦は少なく、反して一枚造りの縄目タタキ技法によるE類が圧倒的に多い。

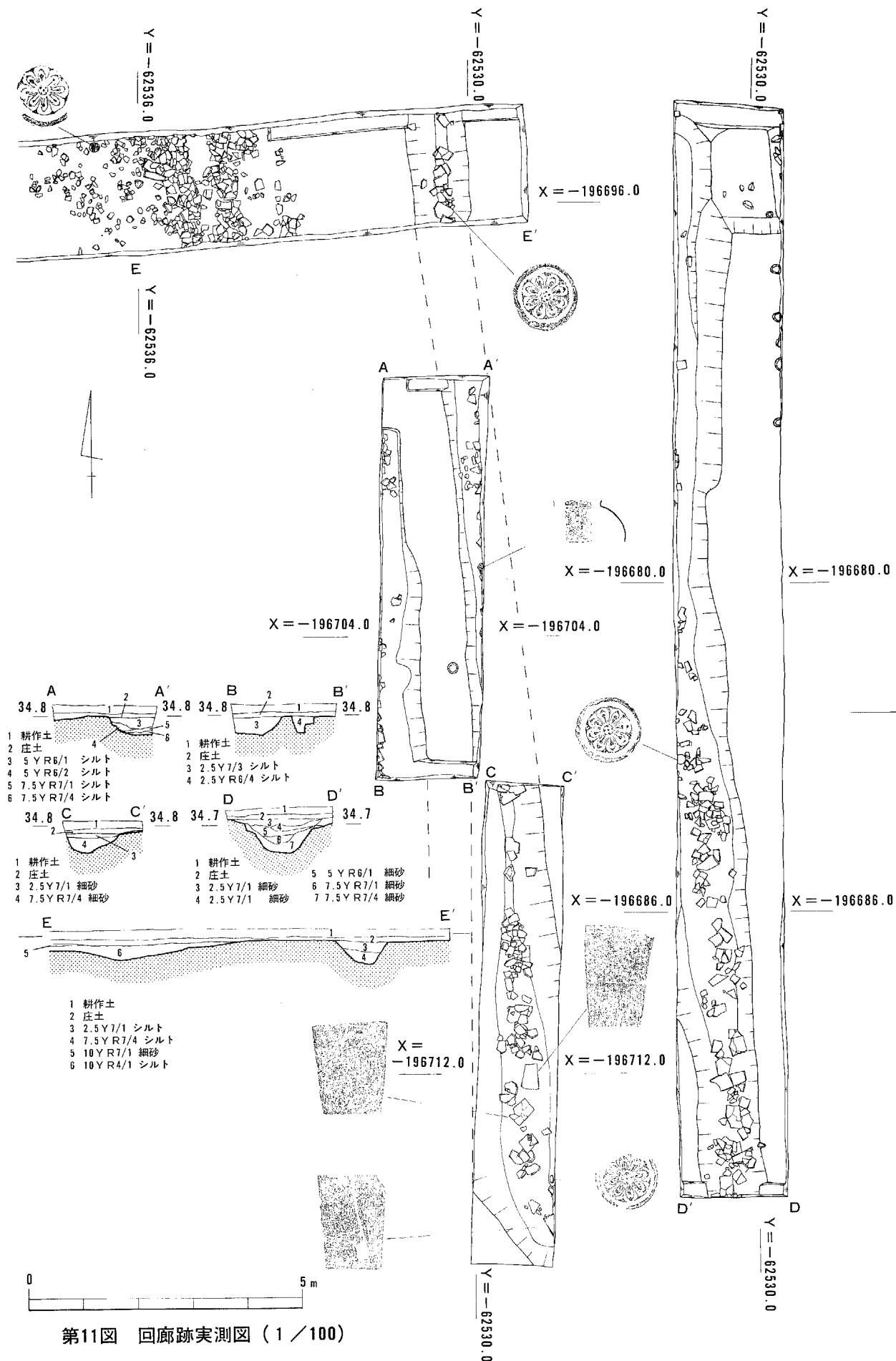
坊舎地域（PL-2F）10トレンチで奈良～鎌倉期にかけての多数の柱跡を検出している。幅2mのトレンチの調査であり柱穴には規則性は認められなかったがおそらく位置関係から坊舎地域となる可能性は高い。

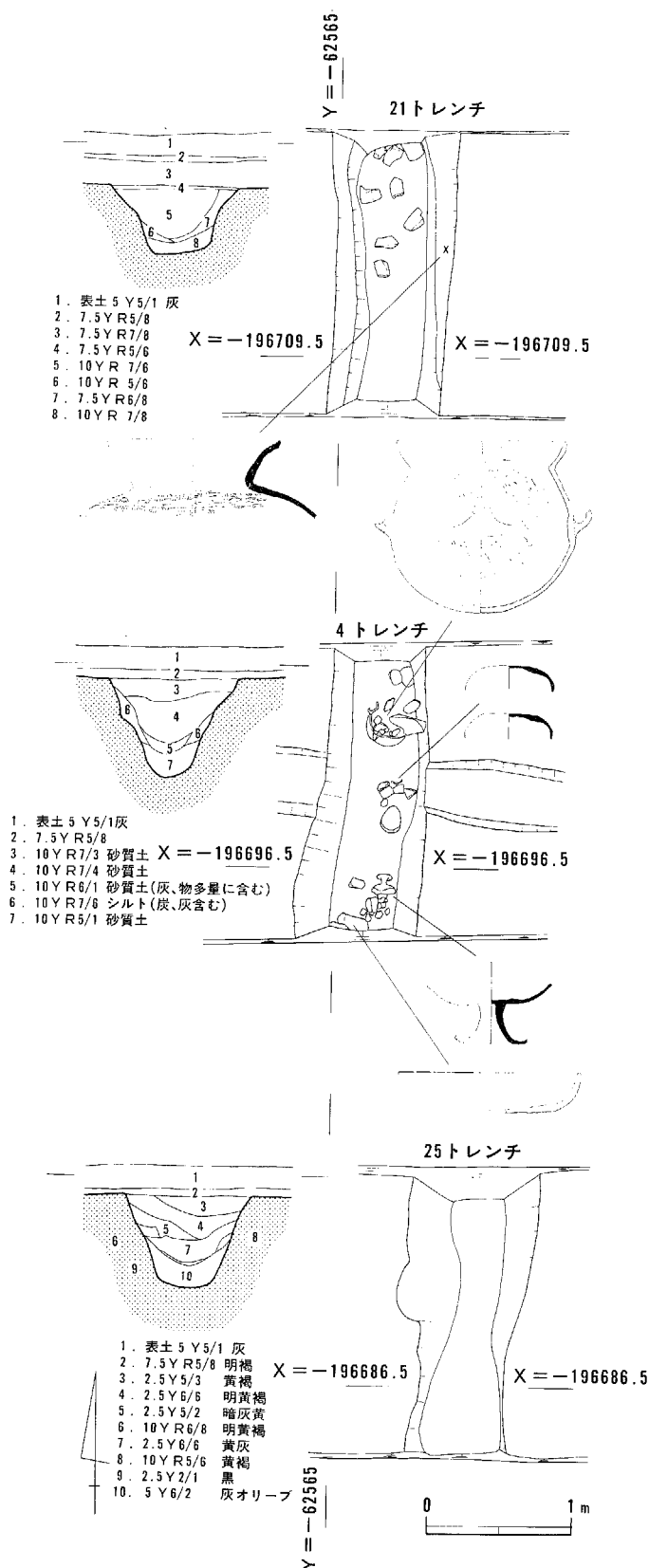
回廊跡（第11図PL7～9）回廊は中門の左右から派生し、金堂あるいは講堂に接続する施設で、塔跡の西12mと15mの位置で2条の溝（1-SD、2-SD）を検出した。この溝に挟まれた空間3mを回廊と推定した。この回廊跡と考えられる空間には、上部施設等は認められず、積極的に回廊とする根拠には乏しいが、2-SDが塔基壇と方向を同じくし、南北方向に一直線に40m以上にわたって延びること、南では一直線に延びた後、東に「L字」に折れ曲がることを主な根拠として回廊と考えた。40トレンチにおいて検出した東西方向の溝316-SD、317-SDは先の1-SD、2-SDが東に屈折したものと考えており回廊の一部と理解している。溝（316-SD、317-SD）の間隔が前者と同様3mであることも矛盾は生じないとする。

その他の遺構

西限の溝（第8、12図PL9、10）塔跡から西54mの地点で、南北に延びる溝（5-SD）を検出した。溝は4トレンチ、21トレンチ、25トレンチにおいて確認している。溝の幅は約90cmで、深さは約70cmを測る。溝底のレベルは北から21、4、25トレンチの順に34.23m、33.77m、34.05mを測る。検出した溝は一条で、溝に伴うと見られる付属施設等の遺構は検出されていない。唯一21トレンチで溝の肩部と西へ1m離れた位置で柱跡を検出している。土層断面の観察では、溝の西側から粘土質の土砂の流入が認められることから先の柱跡の存在と考えあわせれば築地堀等の存在の可能性もあるが、堀の内側に溝を巡らすことは通常考え難いことや4、25トレンチでは調査区の幅が狭いこともあって検出しておらず課題として残る。溝内からは、多くの日常雑器が出土している。21トレンチからは須恵器杯蓋（1、2、3、5）、杯身（6～10）、皿（11）、鉢（12）、片口状の口縁を有する椀（13）、高杯（15）、甕（16）土師器は椀（19）が一点出土している。4トレンチからは須恵器杯蓋（4）、高杯（14）、壺（17、18）土師器は皿（20）、壺（21、22）、鍋（23）が出土している。遺物の多くは、中層～下層にかけて多く見られる。遺物の中には瓦が稀で25トレンチから1片出土したのみである。

201-SD（第13図PL-11）幅1.5m、深さ約10cmの東西方向の溝である。溝内からは瓦が数片





第12図 西限の溝実測図 (1/50)

出土している。西回廊 2-S D が東に折れ曲がった延長線上にほぼあたることから南回廊に伴なう雨落ち溝の可能性はある。溝肩部に認められる柱跡は掘立柱列 211-S F に伴なう柱穴と見られる。

213-S B (第13図 P L-11) 南北 2 間 (1.9 + 2.0m)、東西 1 間 (1.2m) 以上の掘立柱建物跡で、柱穴の径は 15~20cm 程度の小さな規模を有している。柱穴は何れもが周囲が焼けており埋土には炭が含まれることから火災にあった建物と考えられる。

212-S F (P L-11) 南北 2 間 (2.50 + 2.30) 以上の掘立柱列で、柱跡の径は 20~25cm で深さは 20~33cm を測る。方向は塔基壇とほぼ同じであり、同時期と考えられる。建物の可能性もある。

211-S F (第10, 32図 P L-6) 中門推定地の 14 トレンチで検出した。当初建物跡も想定したが 12 トレンチでこの延長線上に柱跡を検出しているため東西に並ぶ柱列であることが判明した。柱間は西から 2.10m、2.25m、2.70m を測る。柱跡は規模の小さなもので径 25cm、大きなもので 45cm を測り不揃いであるが概して深く浅い柱跡で 32cm、深い柱跡で 54cm を測る。柱列のなかで最も規模が大きい 211-S P からは土師器坑 (40) が 1 点出土している。時期は 14~15 世紀と考えられ、柱列の時期もその頃とみられる。

3-S X (第32図 P L-12) 調査区の端に僅かに検出したため規模は不明。土壌底は平らで扁平な割り石を敷き詰め台座とし、側面には、おそらく棺の固定のために転用したと考えられる

行基葺丸瓦が長軸と平行に置かれている。瓦器坑（46）が1点伏せた状態で検出している。埋土には焼土、灰が多量に認められた。瓦器が示す年代は13世紀前半頃と考えられる。

301-S X（第14図P L-12）長軸1.35m、短軸0.55mの長方形のプランを持つ土壇である。削平を受けていると考えられ、深さは10cm程度である。埋土は焼土、灰が多量に認められ3-S Xと同じ状況である。遺物は軒平瓦の一部（13）が出土している。

302-SD（第10図P L-6）白鳳期の瓦を多量に含む溝で、塔跡前面より南に延び段丘崖へと続く。わずかに瓦器を含むため時期は判然としない。鎌倉期の可能性が高い。

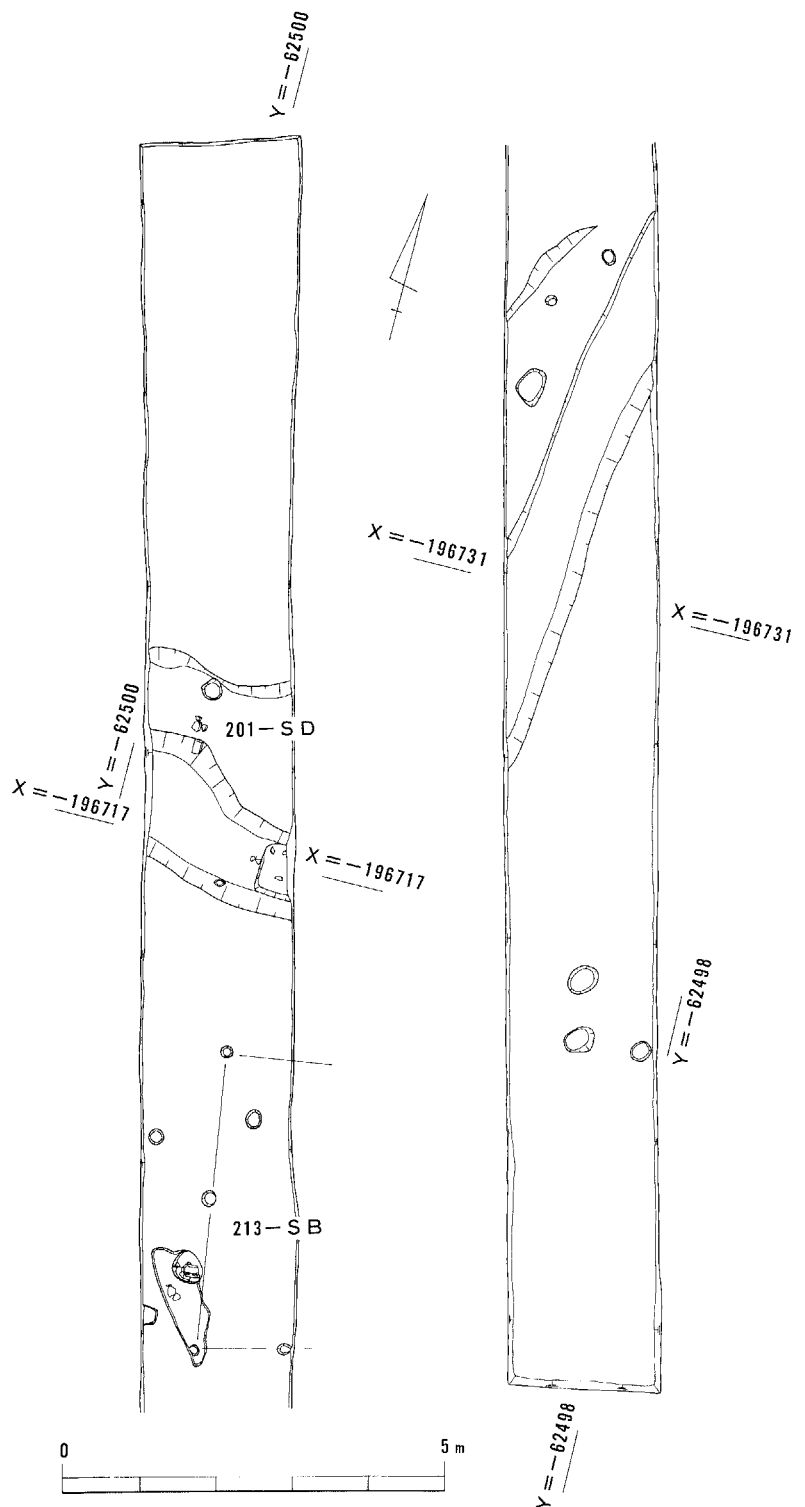
316-SD（第9図P L-4）西回廊が東に屈折したと考えている溝である。2-SDと同一の溝となる可能性が高い。瓦が多く出土しているがその多くは一枚造りのものでこれまでに検出している回廊に伴う瓦とは年代に齟齬が生じる。今後の課題である。遺物は土師器（79、80）が出土している。

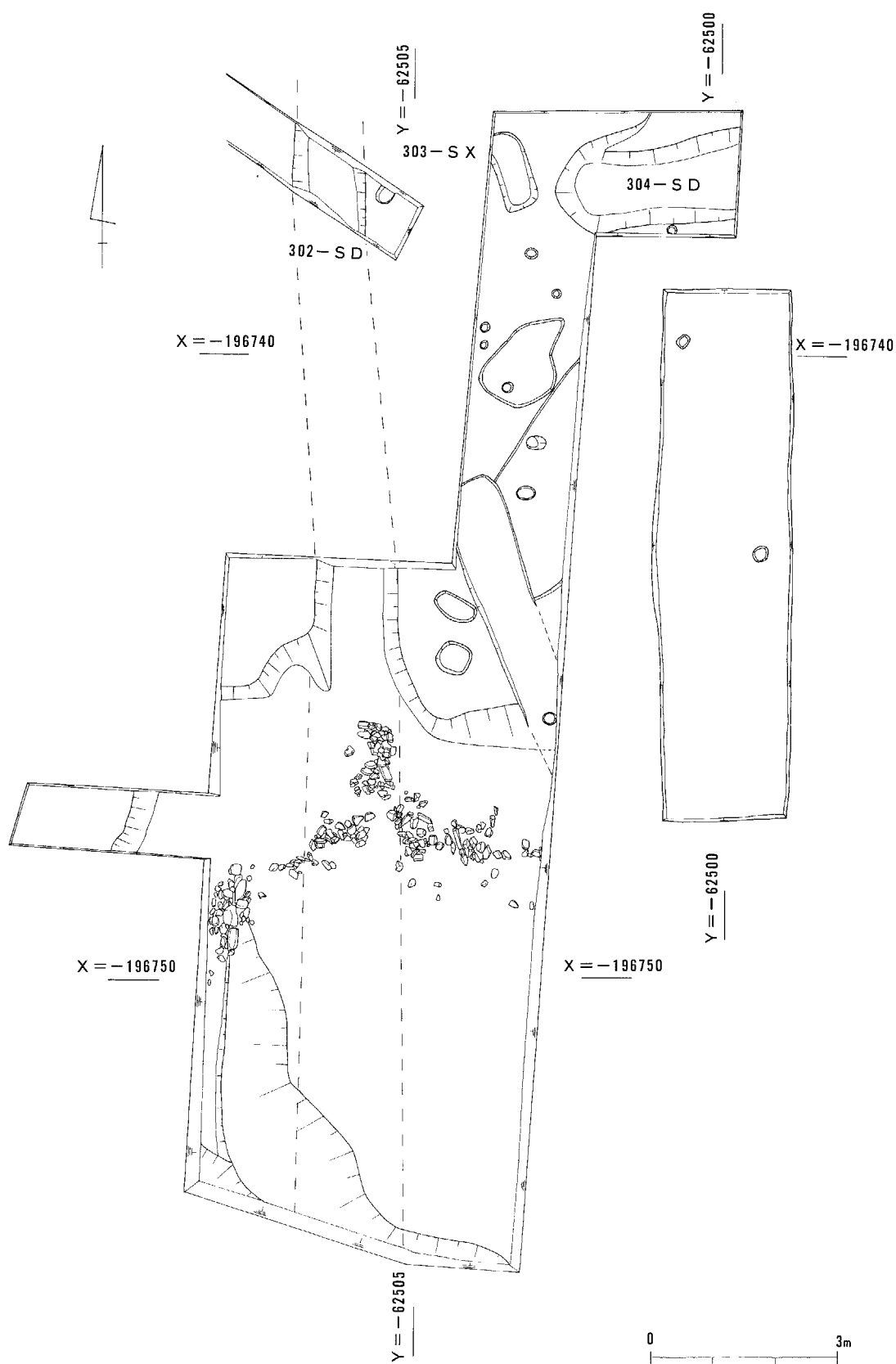
317-SD（第9図P L-4）316-

SDと平行し、回廊に付随すると考 第13図 第12トレンチ遺構平面図（1/100）

えている溝である。44トレンチ内で南に屈曲するのを確認している。

溝の規模は、幅が最大で1.5m、深さは0.4mを測る。遺物は土器類と瓦片が僅かに出土しているのみで316-SDに見られるような出土状態ではない。





第14図 第15トレンチ遺構平面図 (1/100)

2 遺物

遺跡の性格からしても当然の如く瓦類の出土が圧倒的に多い。以下、出土した瓦類、土器類について記述する。

軒瓦 白鳳～室町期にかけて4種の瓦が出土している。便宜上、A～D類に分類し観察することにする。

軒丸A (第15図1、2、16図4、5、6、17図7、9) 単弁八葉蓮花文の瓦で奈良県明日香所在の坂田寺の系統を引いた瓦であることが指摘されている。花卉に一枚の子葉を置いた瓦で花卉の先端は反り返っているのが特徴である。中房には1+4の蓮子を有するの中心線に稜を持った瓦である。子葉は山田寺式に比べ凹凸があり大振りであり、周縁は無文である。

軒丸B (第15図3、第17図8、10) 単弁八葉蓮花文の瓦で花卉に一枚の子葉をおきA類と同系統の瓦である。A類との相違点は花卉の先端が尖り、弁幅もA類より狭いことが挙げられる。子葉が盛り上がり内区全体が凹凸が著しい点となる。

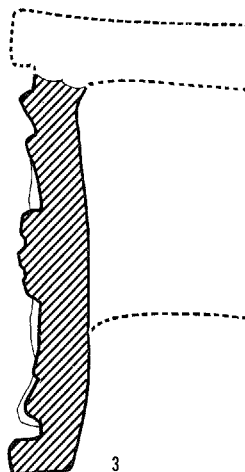
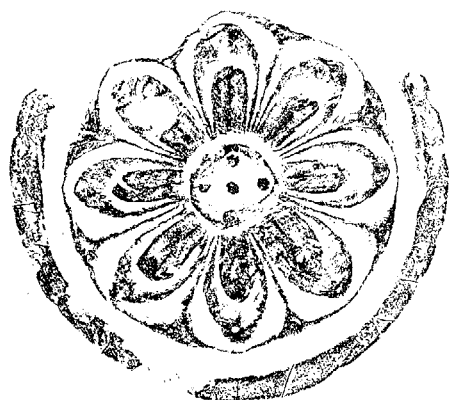
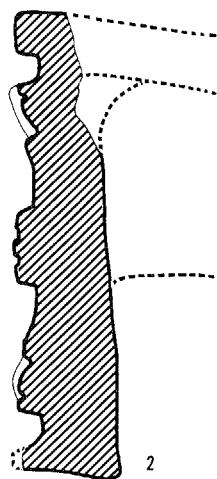
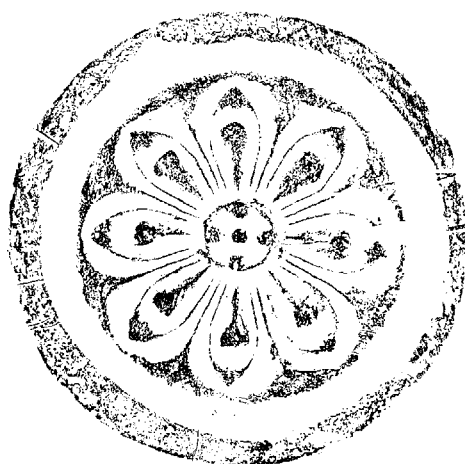
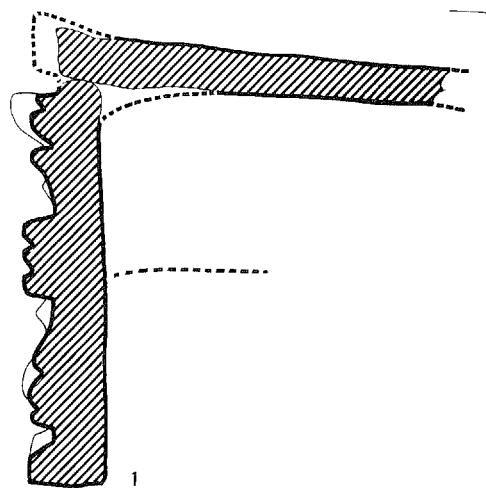
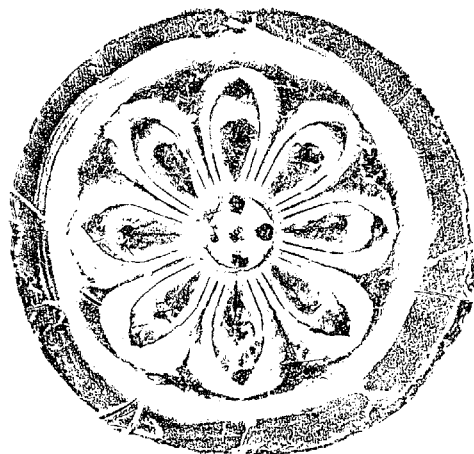
軒丸C (第17図11、P L-11) 有心の三重弧文で直径15.4cmを測る。二次焼成を受けており中門瓦溜まりから出土している。

軒丸D (第17図12、P L-20) 巴文軒瓦(12)で302-S Dから出土している。共伴遺物から13世紀頃の所産と考えられる。

平瓦 5種類の平瓦が出土している。A B C D類は桶巻造りであるのにたいしE類は一枚造りの技法による。

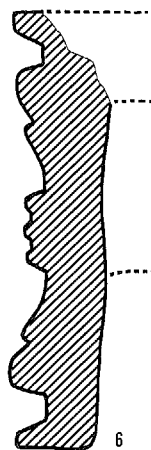
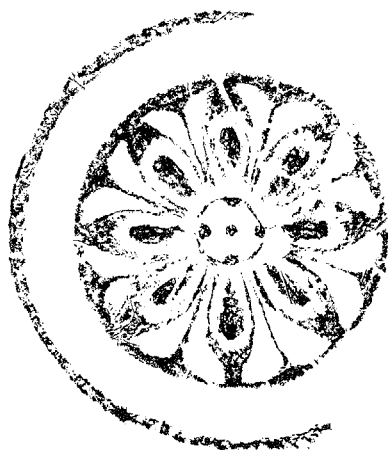
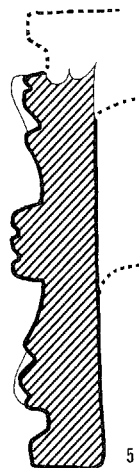
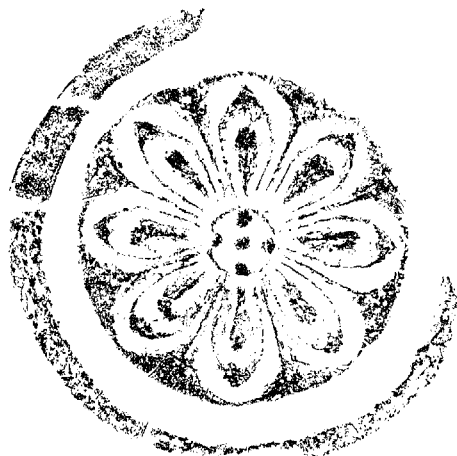
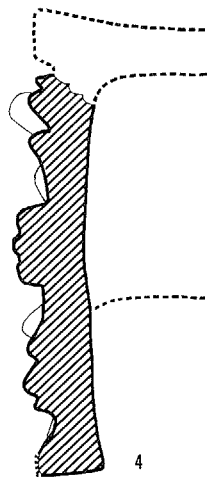
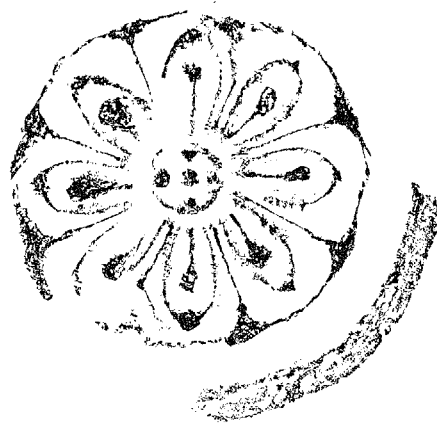
軒丸瓦計測表

類	図版番号	直径	内 区					周 縁			単位cm	
			中房径	蓮子数	弁数	弁幅	弁長	幅	高さ	文様	質	出土地点
B	15-1	18.0	3.0	1+4	8	2.0	4.2	1.0	1.0	無	二次焼成	2-S D
B	2	18.1	2.9	1+4	8	2.0	5.0	1.0	1.0	無	二次焼成	2-S D
A	3	17.2	3.2	1+4	8	2.0	4.7	1.4	0.9	無	須恵質	2-S D
B	16-4	18.6	3.0	1+4	8	2.0	4.3	1.0	0.6	無	二次焼成	回廊瓦溜まり
B	5	17.6	2.6	1+4	8	2.3	4.4	1.0	0.8	無	二次焼成	中門瓦溜まり
B	6	17.4	2.8	1+4	8	2.1	4.6	0.7	1.2	無	二次焼成	中門瓦溜まり
B	17-7	18.8	2.6	1+4	8	2.2	4.6	1.2	1.0	無	二次焼成	中門瓦溜まり
A	8	18.8	2.6	1+4	8	2.0	4.6	0.9	1.1	無	須恵質	中門瓦溜まり
B	9	19.4	2.7	1+4	8	2.1	4.6	0.9	1.2	無	二次焼成	中門瓦溜まり
A	10	18.0	2.4	1+4	8	2.8	4.7	1.4	1.0	無	須恵質	金堂瓦溜まり
C	11	15.4									二次焼成	中門瓦溜まり
D	12	13.6				2.9						

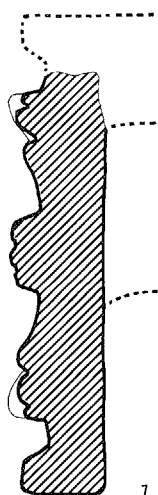
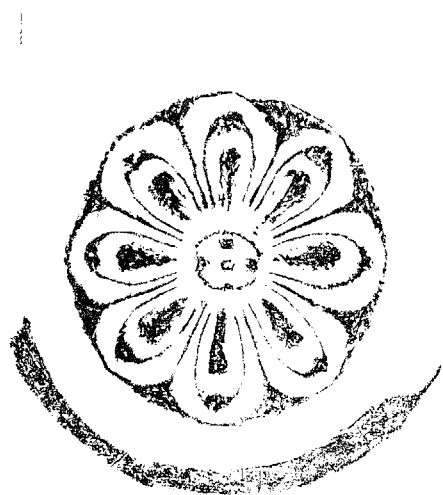


第15図 軒丸瓦拓影・実測図 (1)(1 / 3)

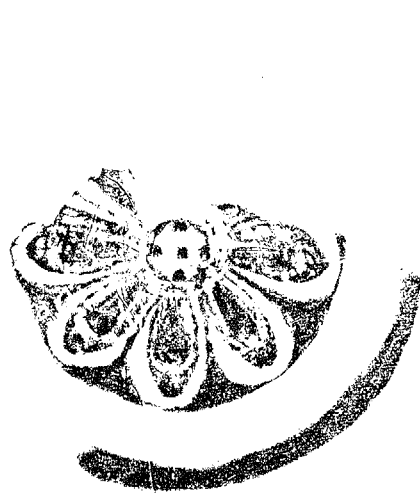




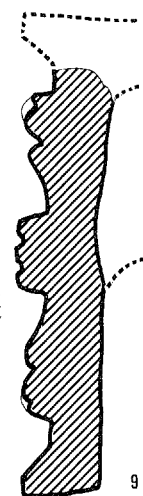
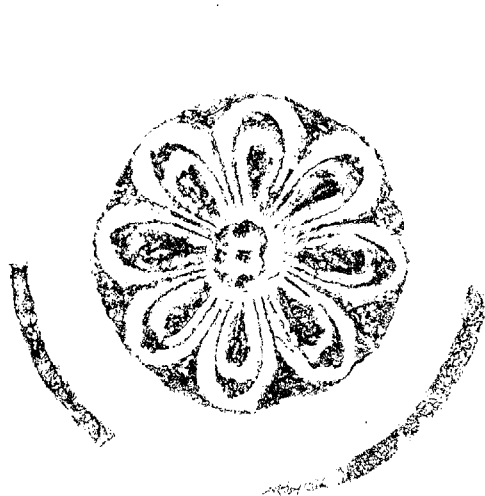
第16図 軒丸瓦拓影・実測図 (2)(1 / 3)



7



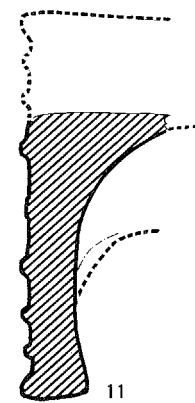
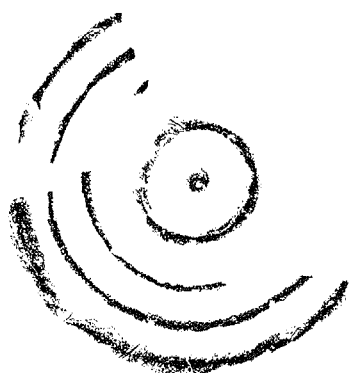
8



9



10



11



12



13

第17図 軒丸瓦拓影・実測図 (3)(1/3)



平瓦A類（第18図14、15、第19図16、17）最大のもので46cmを超える瓦がある。桶巻の4分割による造りで、凹面には幅3cm程の模骨が10枚観察できる。さらに布目が顕著に残り、1cm角のなかに縦糸横糸の本数は8～10本観察できる。凸面は格子タタキで叩き締めた後、丁寧にスリケシている。焼成は赤焼けである。

平瓦B類（第20図19）規格はA類と差はない。A類と同一と考えても差しつかえない瓦である。やや異なる点は格子タタキが凸面に顕著に残る点である。最上廃寺の主要平瓦と技法が類似した瓦である。

平瓦C類（第18図15第19図16、17）長さとの比率がA類と同規格で細長い瓦である。凸面におけるスリケシもA類と類似するが縄目タタキの痕跡がわずかに残る。A類に比べて後出の要素であろうか。焼成は赤焼けである。

平瓦D類（第22図23）長さとの比率が前者に比較し方形に近く、赤焼けに対して須恵質をしている。凸面全体に斜格子によるタタキが顕著である。

平瓦E類（第23～26図35）凸面には粗い縄目タタキが顕著で須恵質をしている一枚造りの瓦で平瓦のなかでは最も新しい瓦である。紀伊国分寺の瓦に類例がある。

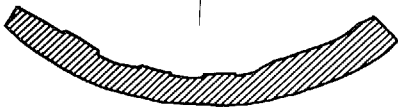
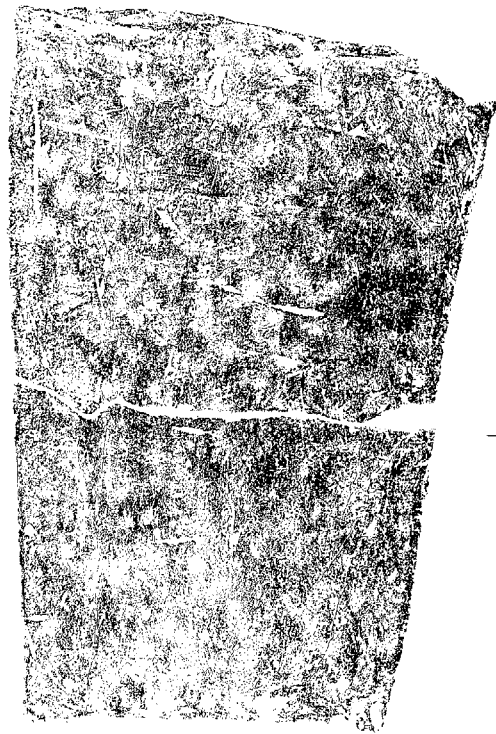
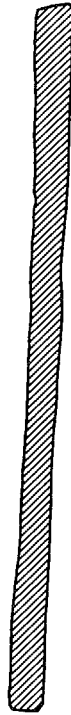
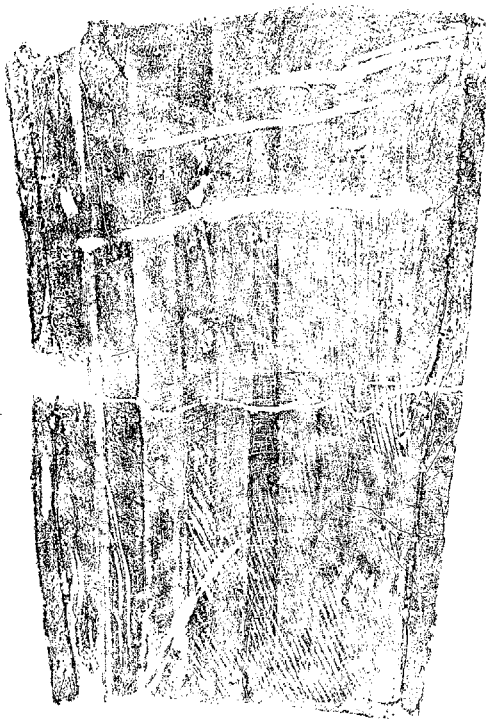
軒平瓦（第17図13）軒丸瓦D類(12)と組み合わせが考えられる瓦で、301-SXから出土している。

丸瓦（第27、28図PL-19）無段式丸瓦（行基葺）と有段式丸瓦（玉縁式）が出土している。出

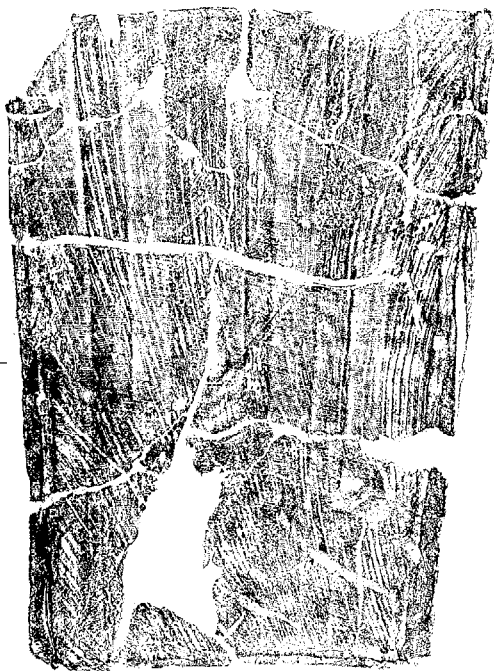
平瓦計測表

単位cm

類	図版番号	全長	上弦幅	厚さ	下弦幅	厚さ	弧深	模骨幅	凹面	凸面 (布目)	成形	焼成	出土地点
A	18-14	46.5	29.5	1.8	22.0	2.1	4.3	2.4	9本/cm	格子+スリケシ	桶巻	—	2-S D
	15	44.0	28.3	1.8	23.6	1.7	5.0	2.7	8本/cm	格子+スリケシ	桶巻	茶	2-S D
	19-16	43.4	32.5	2.3	26.2	2.0	5.1	2.7	9本/cm	格子+スリケシ	桶巻	赤	2-S D
	17	41.0	29.5	1.3	25.0	1.6	5.1			格子+スリケシ	桶巻	茶	2-S D
	20-18	45.3	32.7	2.0	25.6	1.7	5.1	2.4	10本/cm	格子+スリケシ	桶巻	赤	2-S D
B	19	42.8		2.4	24.5	1.8	4.5	2.4		格子タタキ	桶巻	茶	2-S D
C	21-20	44.6	30.0	2.0	26.1	2.0	4.2	2.6	10本/cm	縄目+スリケシ	桶巻	灰	2-S D
	21	44.2	29.0	1.9	24.5	1.3	4.8	2.6		縄目+スリケシ	桶巻	茶	2-S D
	22-22	46.1	31.0	2.0	25.0	1.7	5.3	2.5	10本/cm	縄目+スリケシ	桶巻	—	2-S D
D	23	39.8	30.4	2.0	23.8	1.6	3.0	2.4	6本/cm	格子タタキ	桶巻	—	回廊瓦溜まり
E	23-24	38.4	27.7	2.2		1.8	4.8		10本/cm	縄目	一枚造り	茶	回廊瓦溜まり
	25	38.0	27.2	2.0	25.0	1.7	4.2			縄目	一枚造り	茶	回廊瓦溜まり
	24-28	38.8	30.7	2.4	25.3	2.4	4.2		7本/cm	縄目	一枚造り	茶	中門瓦溜まり
	25-30	38.4	27.6	2.4	24.8	2.3	3.8		8本/cm	縄目	一枚造り	灰	中門瓦溜まり
	31	38.2	27.3	2.6	25.0	2.1	3.6		7本/cm	縄目	一枚造り	灰	中門瓦溜まり
	32	38.9	28.1	2.3	25.5	2.3	4.0		8本/cm	縄目	一枚造り	茶	中門瓦溜まり
	26-34	35.1	27.4	2.0	23.4	1.8	5.2		8本/cm	縄目	一枚造り	赤	中門瓦溜まり



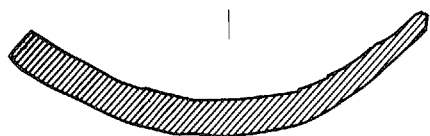
14



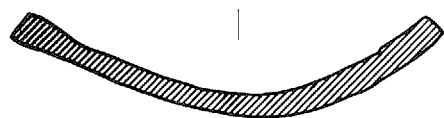
15

0 30cm

第18図 平瓦拓影・実測図(1)(1/5)



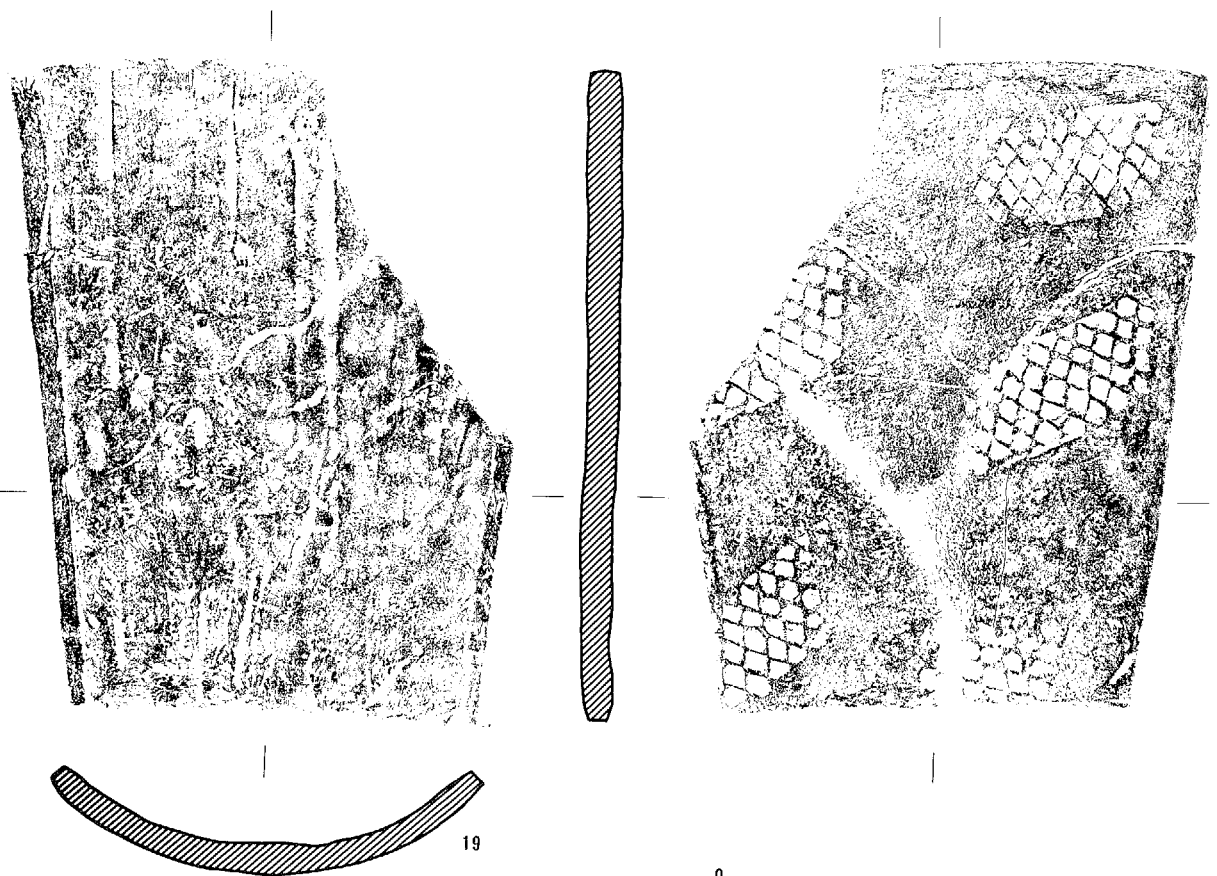
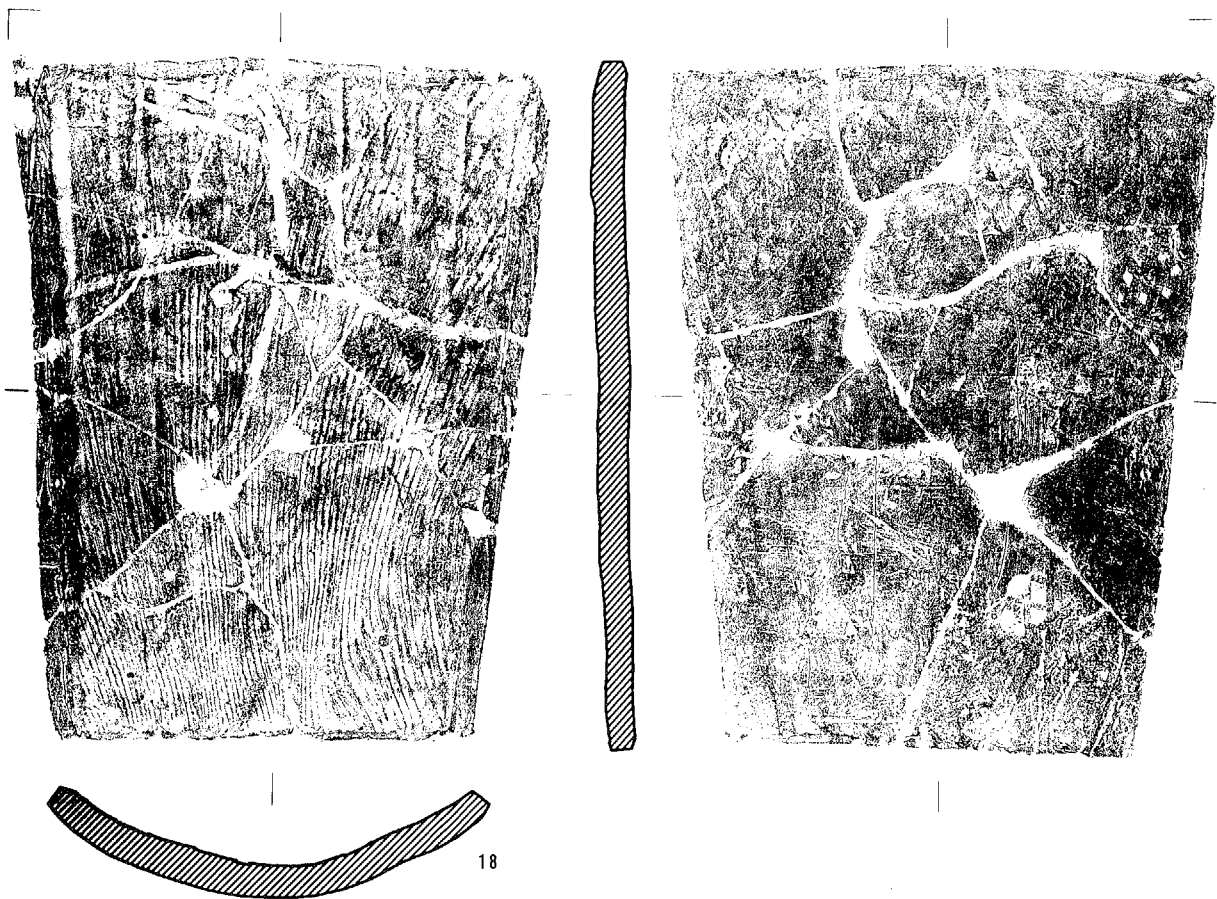
16



17

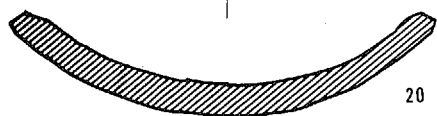
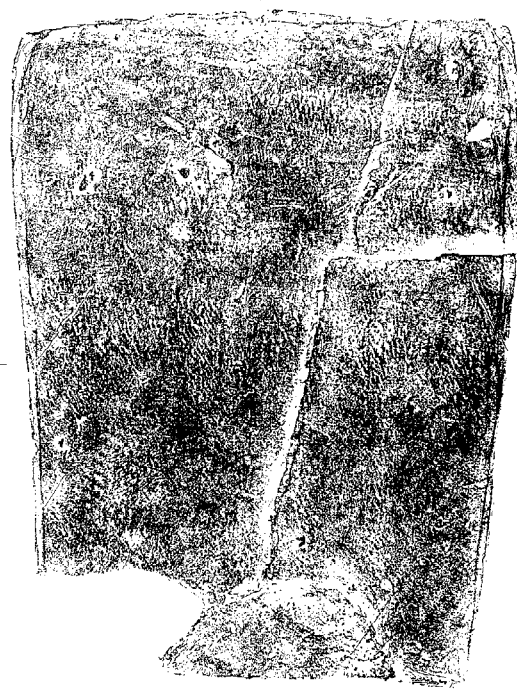
0 30cm

第19図 平瓦拓影・実測図(2)(1/5)

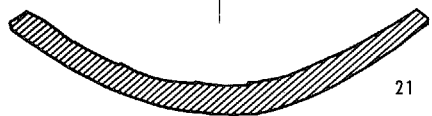
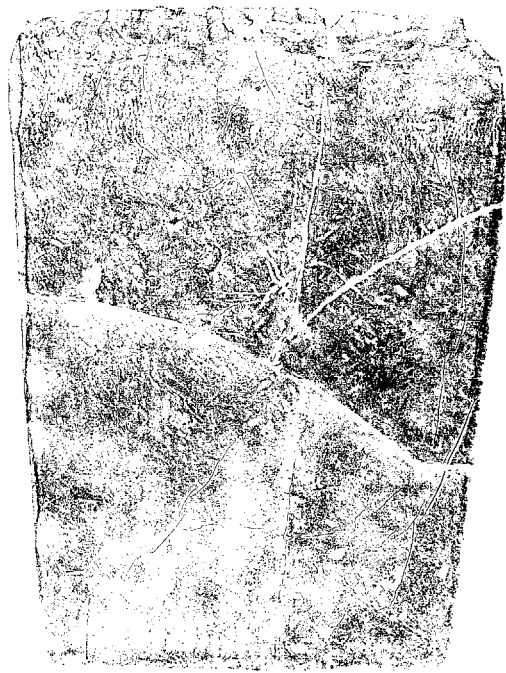


0 30cm

第20図 平瓦拓影・実測図(3)(1/5)



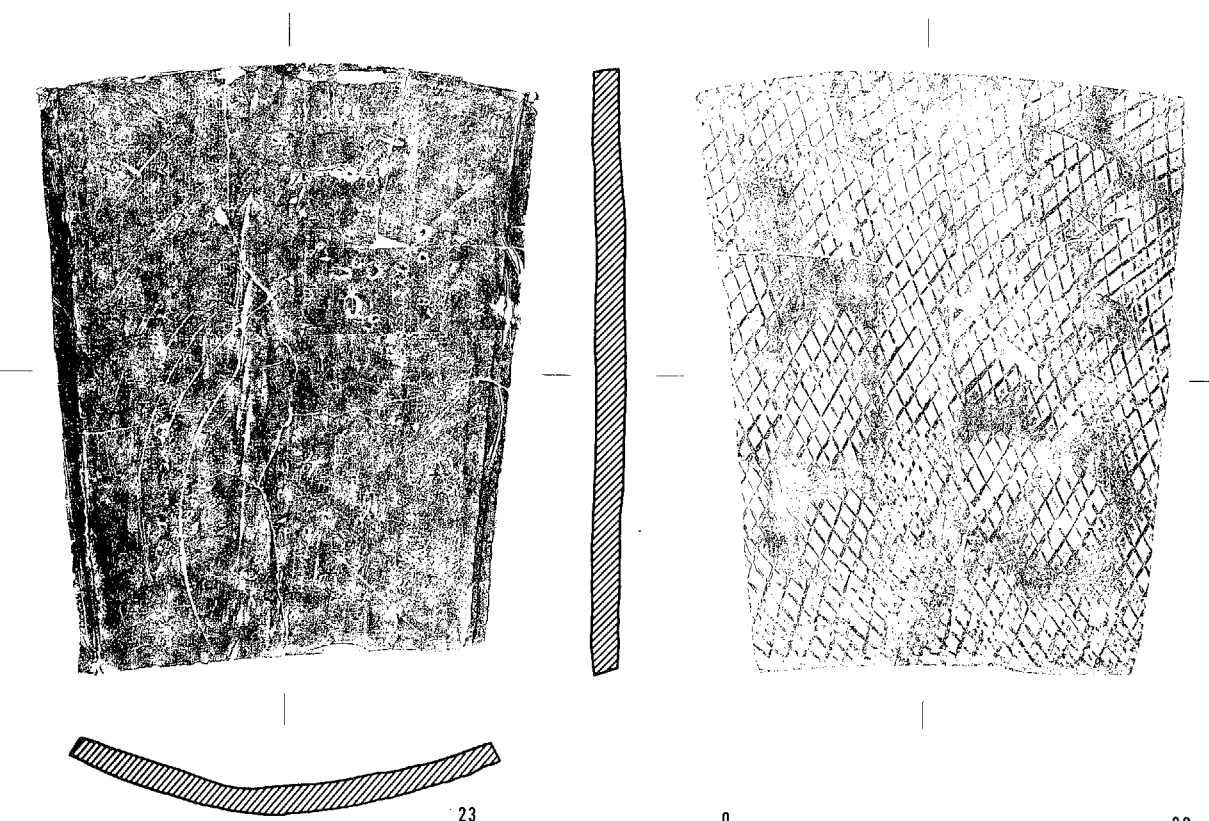
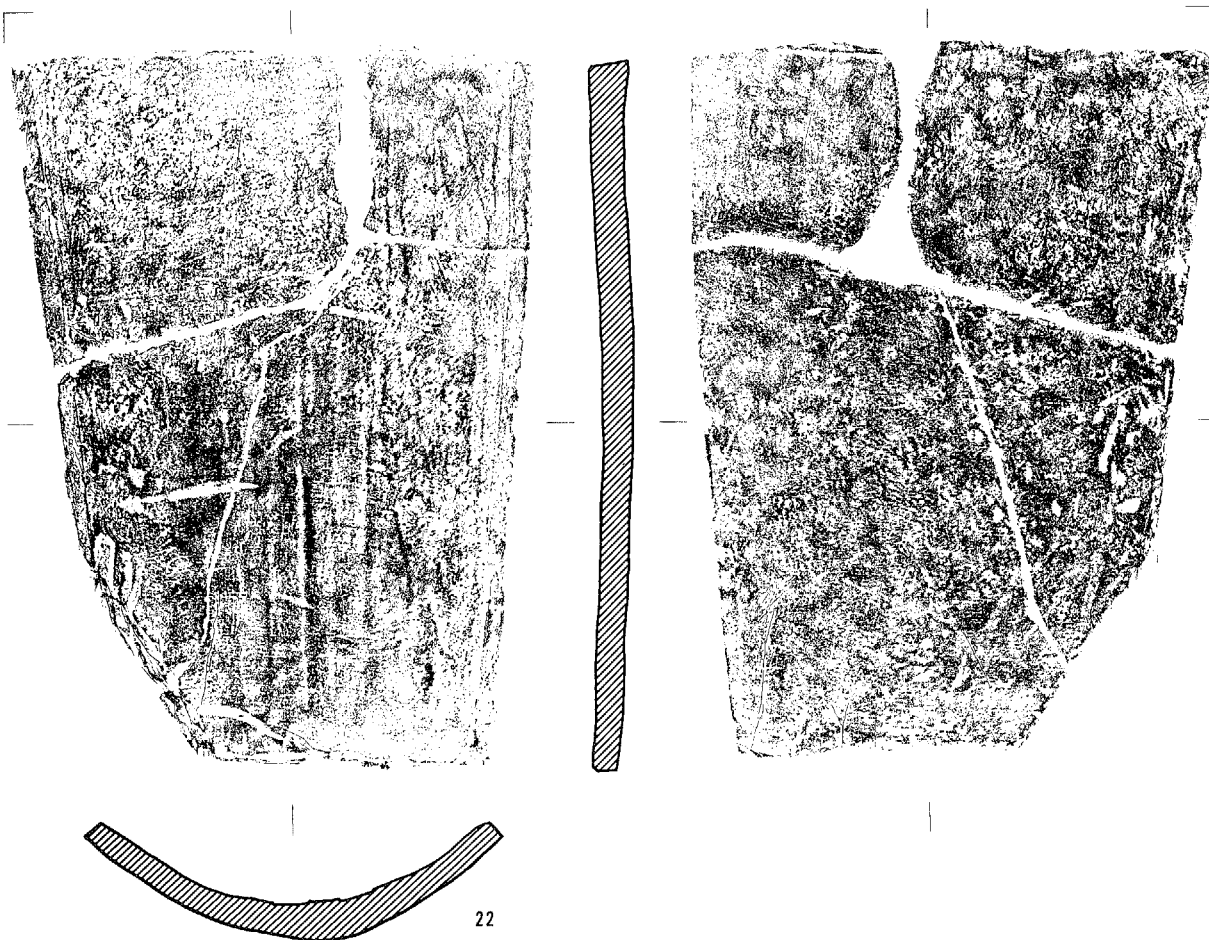
20



21

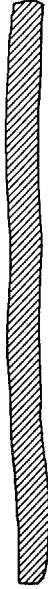
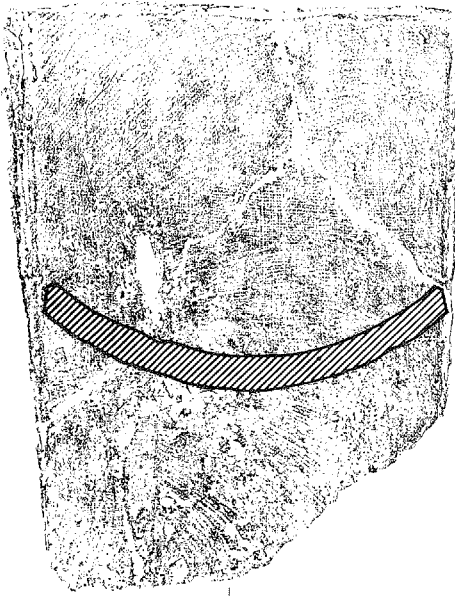
第21図 平瓦拓影・実測図(4)(1/5)

0 30cm

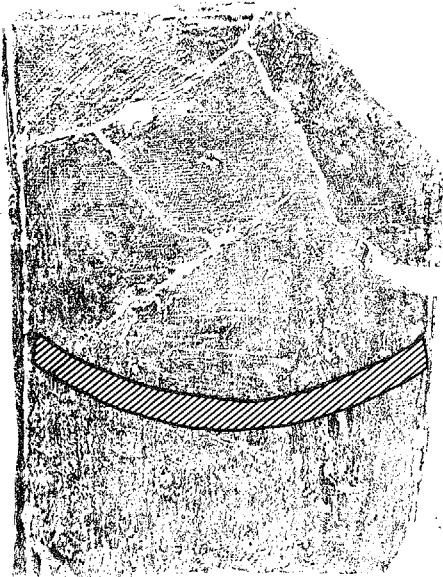


第22図 平瓦拓影・実測図 (5)(1 / 5)

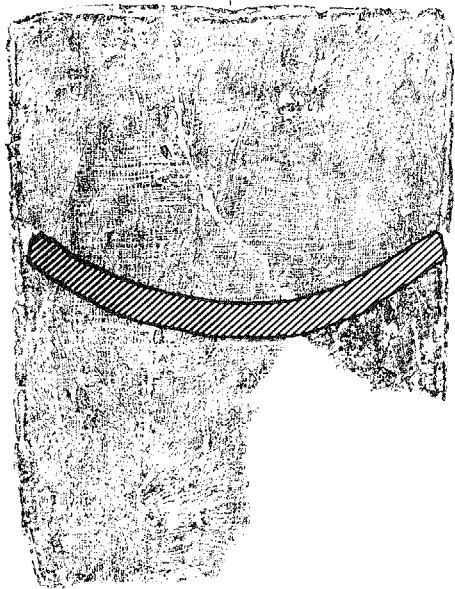
0 30cm



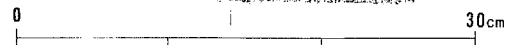
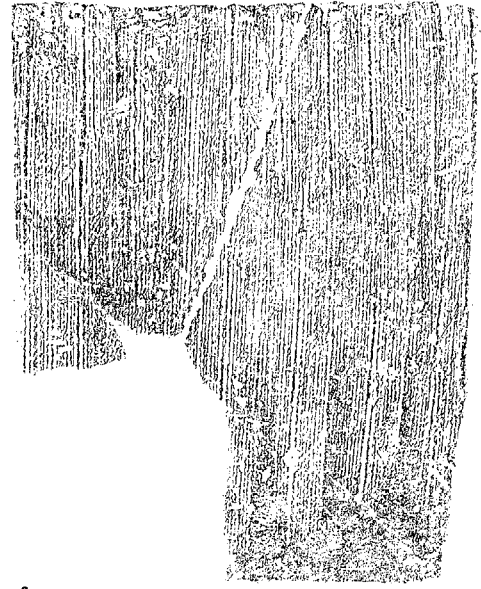
24



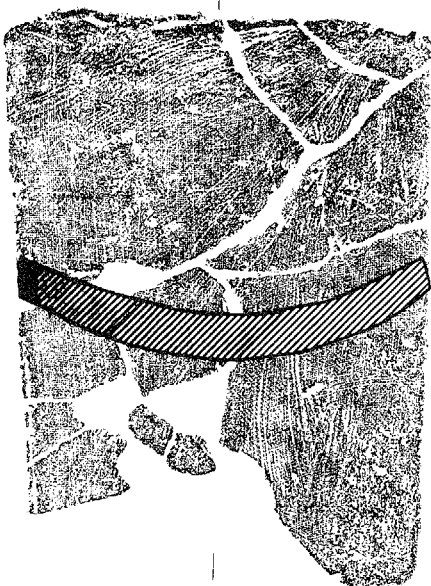
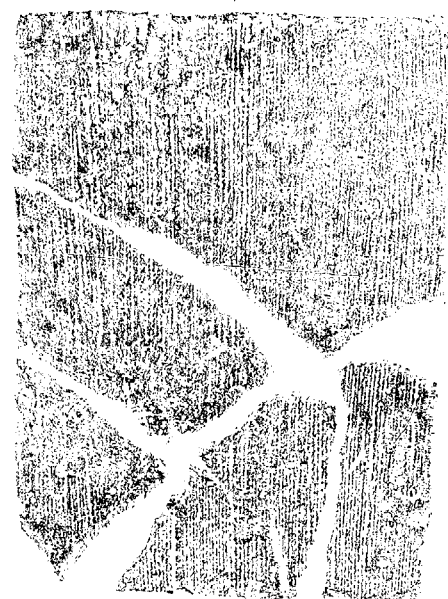
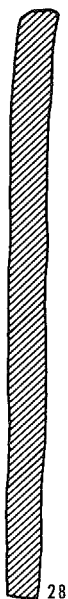
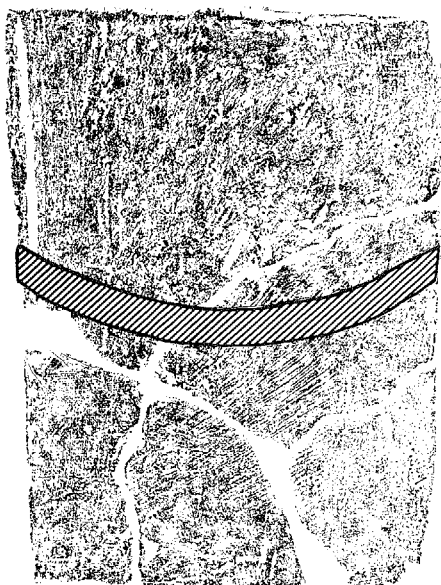
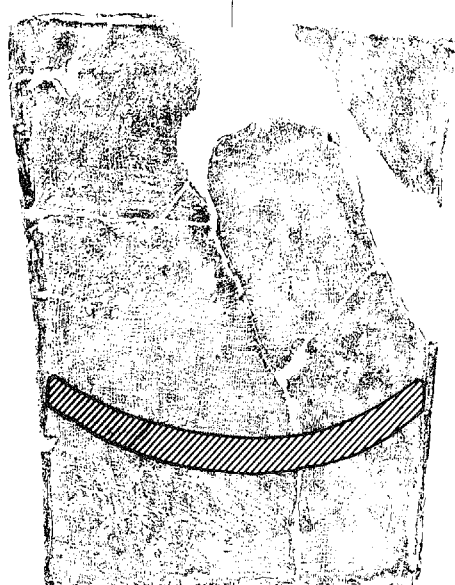
25



26

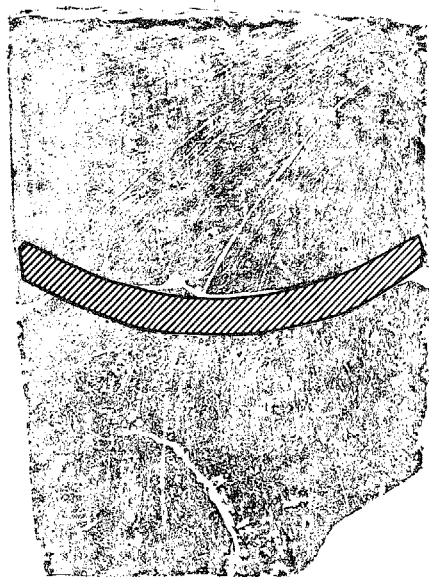


第23図 平瓦拓影・実測図 (6)(1 / 5)

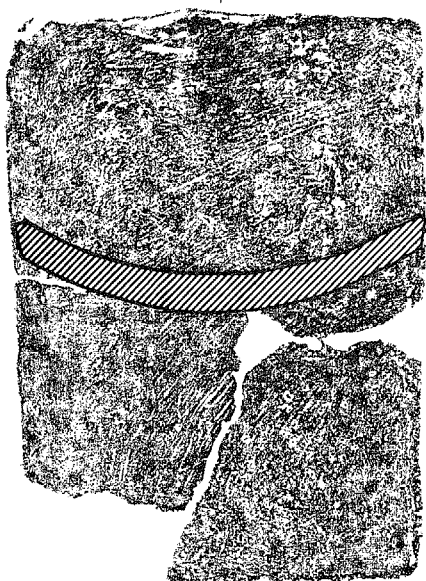


0 30cm

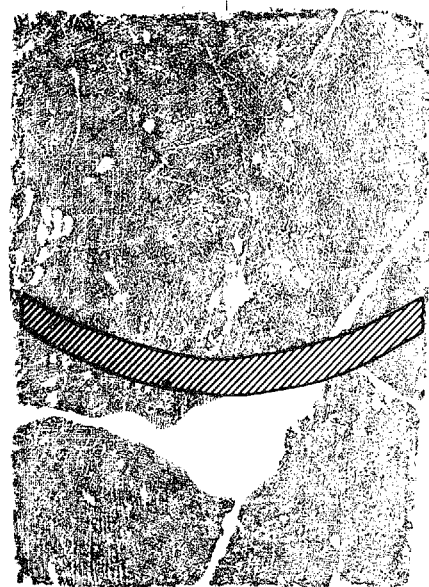
第24図 平瓦拓影・実測図 (7)(1 / 5)



30



31

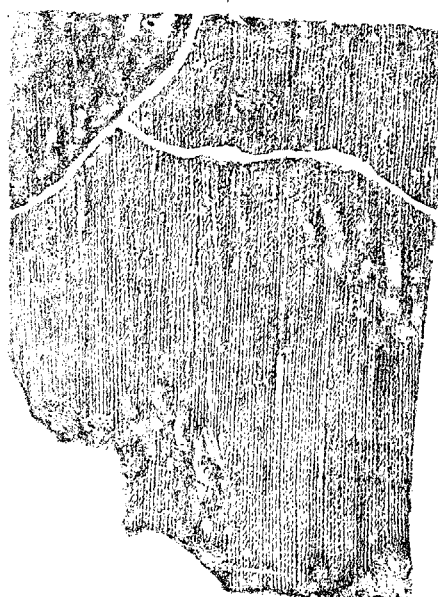
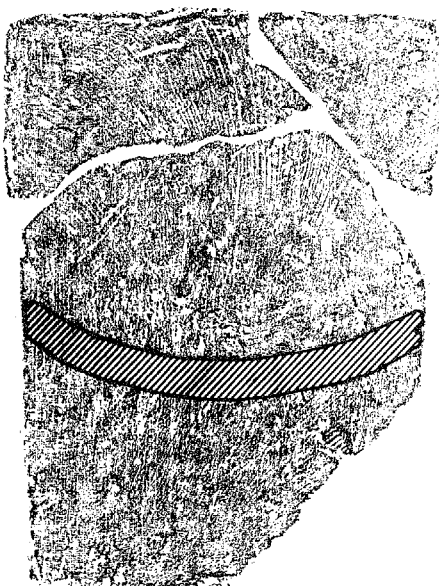
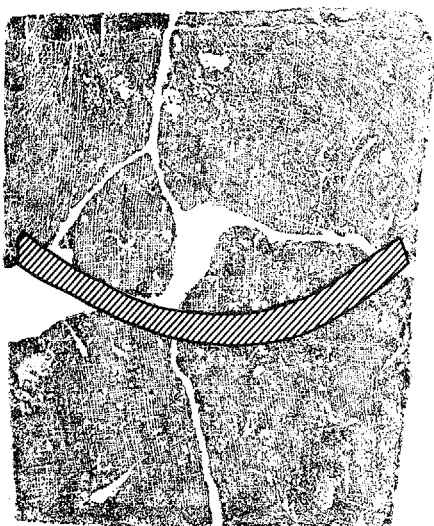
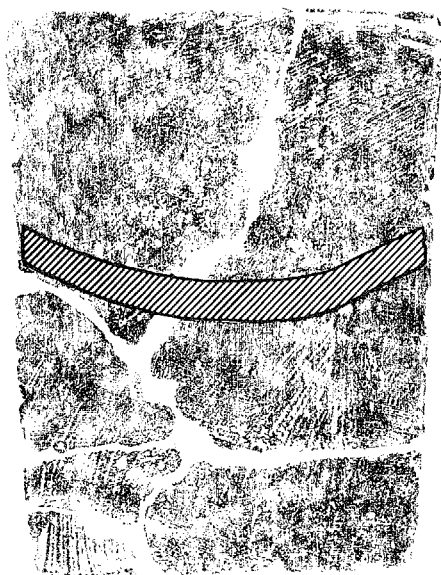


32



第25図 平瓦拓影・実測図(8)(1/5)

0 30cm



第26図 平瓦拓影・実測図 (9)(1 / 5)

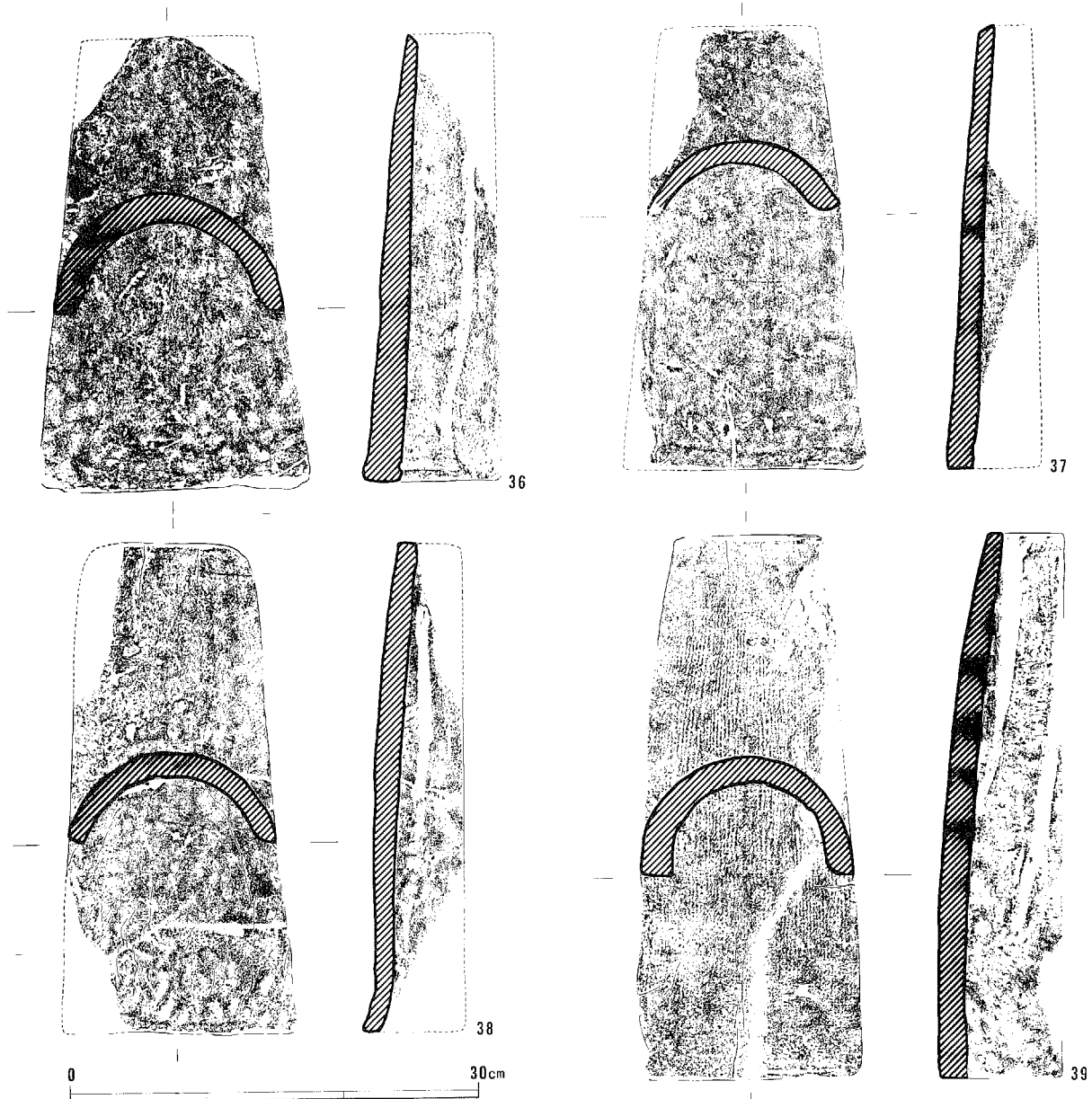
0 30cm

土量は前者が圧倒的に多く 9 割以上を占める。無段式の丸瓦は、凸面を丁寧にスリケシているタイプと、凸面に縄目が顕著に残るタイプがあり 2 種に分類が可能である。前者は全長 34cm 前後のものが多いが、後者は比較的大きく 40cm 前後のものが多い傾向にある。

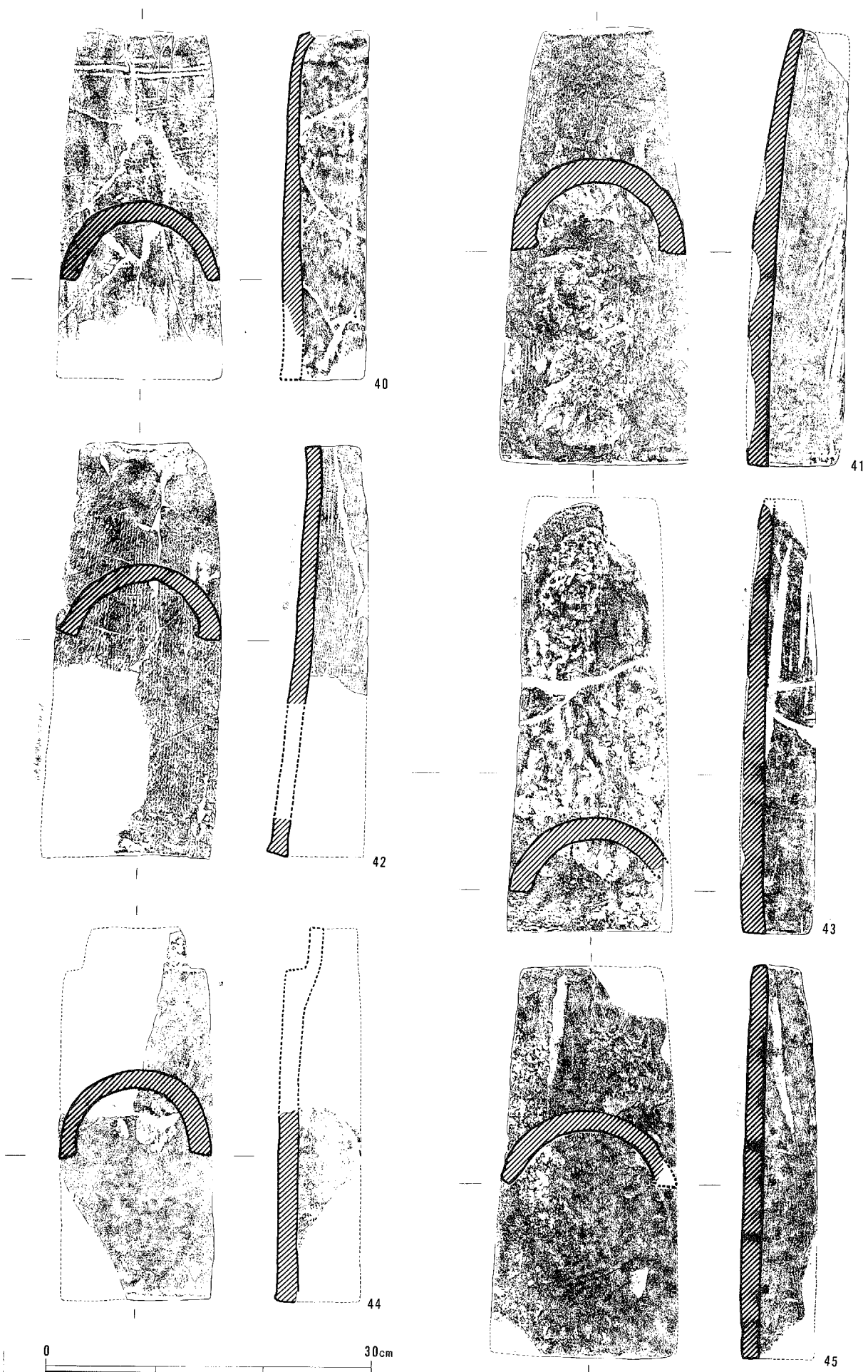
土器類 西限の溝 (5-S D)、講堂跡推定地北溝 (18-S D) から須恵器と土師器が出土している。

5-S D 出土 (第30図、P L-19) 須恵器杯蓋 (1~9)、皿 (10~11)、鉢 (12, 13)、高杯 (15)、甕 (16) 土師器は椀 (19) が一点出土している。4 トレンチからは須恵器杯蓋 (4)、高杯 (14)、壺 (17, 18)、土師器は皿 (20)、壺 (21, 22)、鍋 (23) が出土している。遺物の多くは、中層~下層にかけて多く見られる。遺物の中には瓦が稀で 25 トレンチから 1 片だけ出土している。

杯蓋は杯身との分類が困難で杯身が含まれている可能性はある。口径は小さなもので 10.1cm、最大のものは 12.0cm を測る。概して 11cm 前後のものが多い。器高は 3.3~3.5cm の範囲に収まるも

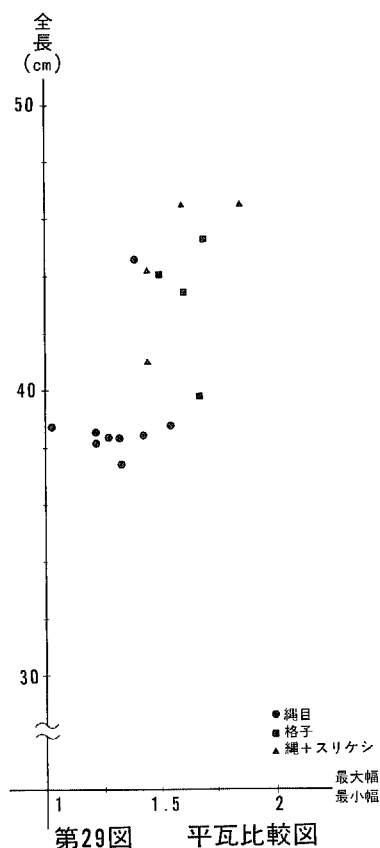


第27図 丸瓦拓影・実測図 (1)(1/5)



第28図 丸瓦拓影・実測図(2)(1/5)

のが多い。天井部径はこれに反して5.2～7.2cmと幅がある。形態からは（1～4.6）、（5.7.8.9）の2形態に分類できる。



第29図 平瓦比較図

皿（10、11）は10の口径が13.6cm、器高3.4cm、11は21.7cm、器高3.7cmと違いはあるが形態的には類似している。焼成は軟質で、色調は灰色を呈している。鉢12は口径17.2cmを測る。口縁部は内湾し、体部に浅い沈線が巡る。底部が欠損しているため、平底となるかあるいは鉄鉢型となるのかはあきらかではない。13は片口状の口縁を有し、口径は16cmを測る。近い例として奈良県下ツ道西測溝SD1900A出土の鉢Aがあげられよう。高杯14は歪んでいるため口径は推測の域をでないが17cm前後と考えられる。器高は11cm前後で脚裾部径は9.6cmを測る。15大型高杯の脚と考えられる。太宰府1A期7世紀中頃～後半の宮ノ本4号窯出土の高杯に類似していると考えられる。

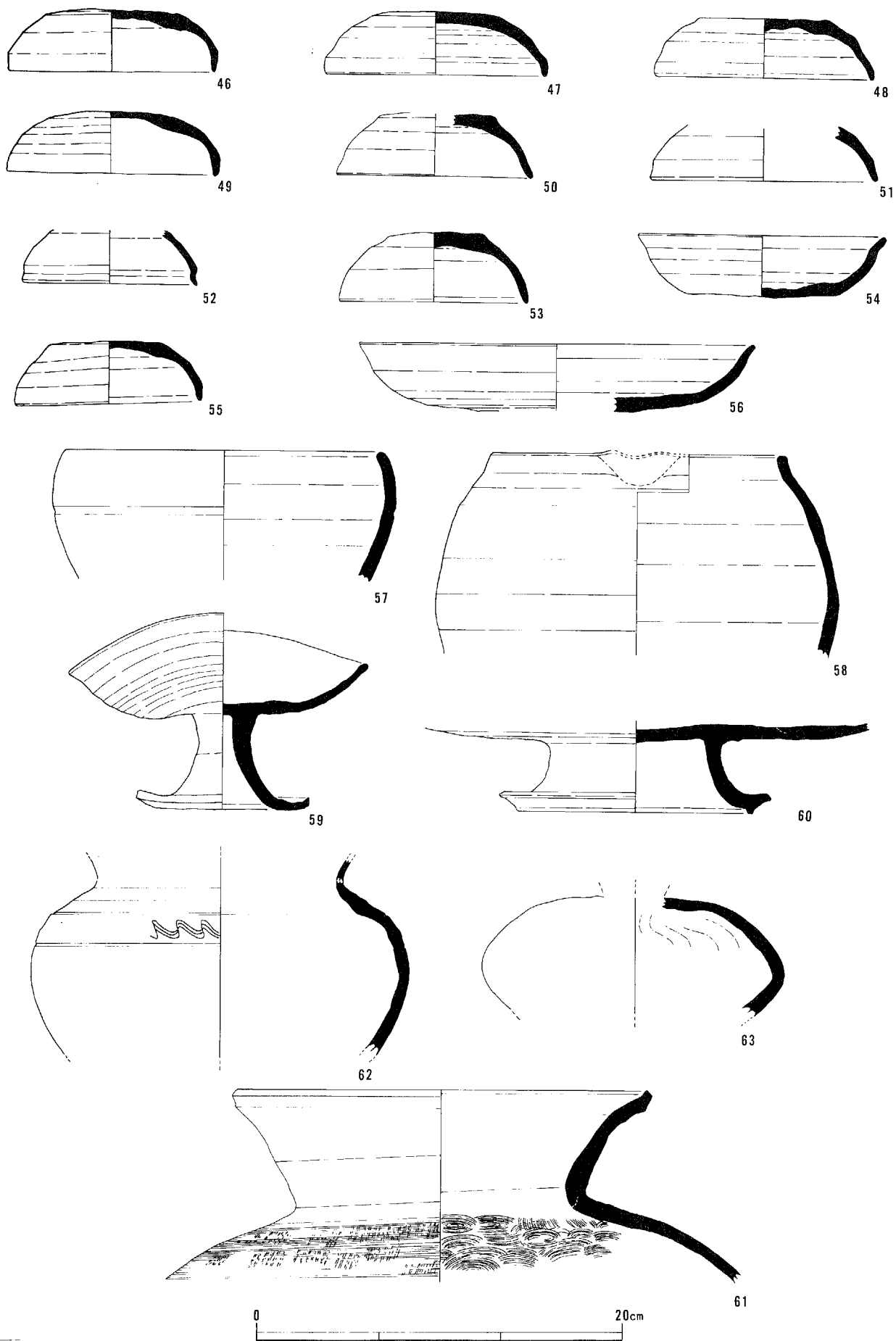
土師器は、皿、甕、鍋が出土している。皿は口径14cm、24cmの大小があり、(65)は片口状の口縁となる。器面の剥離が著しく調整の観察はできない。甕(66)(67)は小型で口縁径はそれぞれ12.0cm、13.0cmを測る。器高は11.0cm、11.6cmを測る。器面はハケによる調整痕が顕著に残る。鍋は口縁径が22.0cm、器高が22.0cmを測る。器面にはハケによる調整痕が認められる。

18-SD出土（第31図69、70、71、PL20-69）溝の中からは須恵器杯身が3点出土している。杯身（69）は口径10.6cm、器高2.5cmを測る。口縁部は大きく外反する形状を示し、底部は平底で、焼成は軟質である。（70）は口径11.5cm、器高3cmを測る。口縁部は外反する形状を示し、底部はやや丸味を持つ。焼成は（69）と同様に軟質である。（70）は口径13.5cmで、焼成は前者に比べ堅く焼きしまっている。

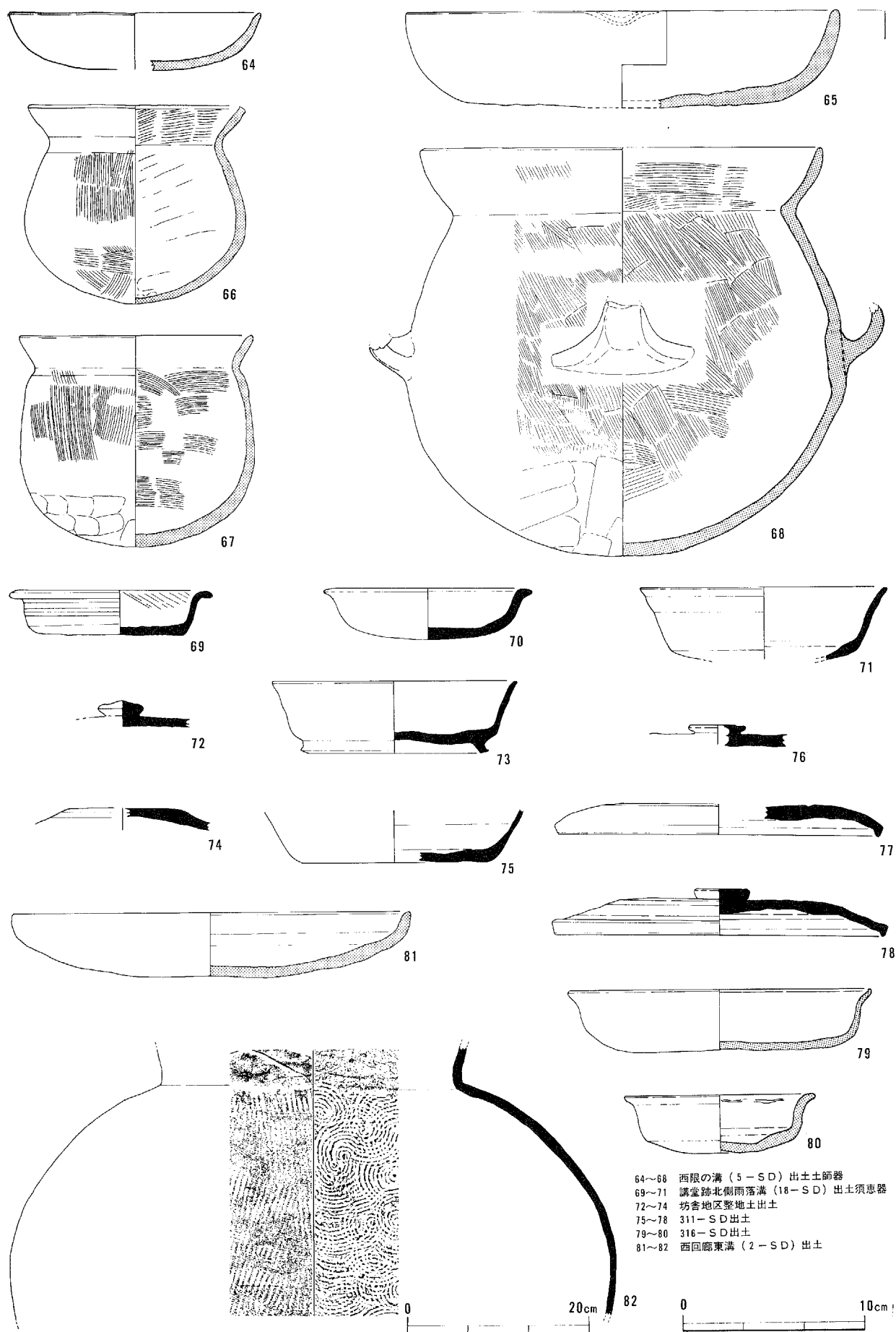
坊舎地区出土（72～74）須恵器の杯蓋と杯身が出土しているが図化できるものは少ない。蓋は宝珠つまみのものと偏平なつまみを有するものがある。杯身は口径13.4cm、器高4cmを測り、底部には「ハの字」に開く張り付けの高台が付く。

316-SD出土（79・80）瓦と共に土師器皿が出土している。口縁径は16.6cm、10.4cmと大小がある。器高は共に3.2cmを測る。器面の調整は剥離が著しく不明瞭である。

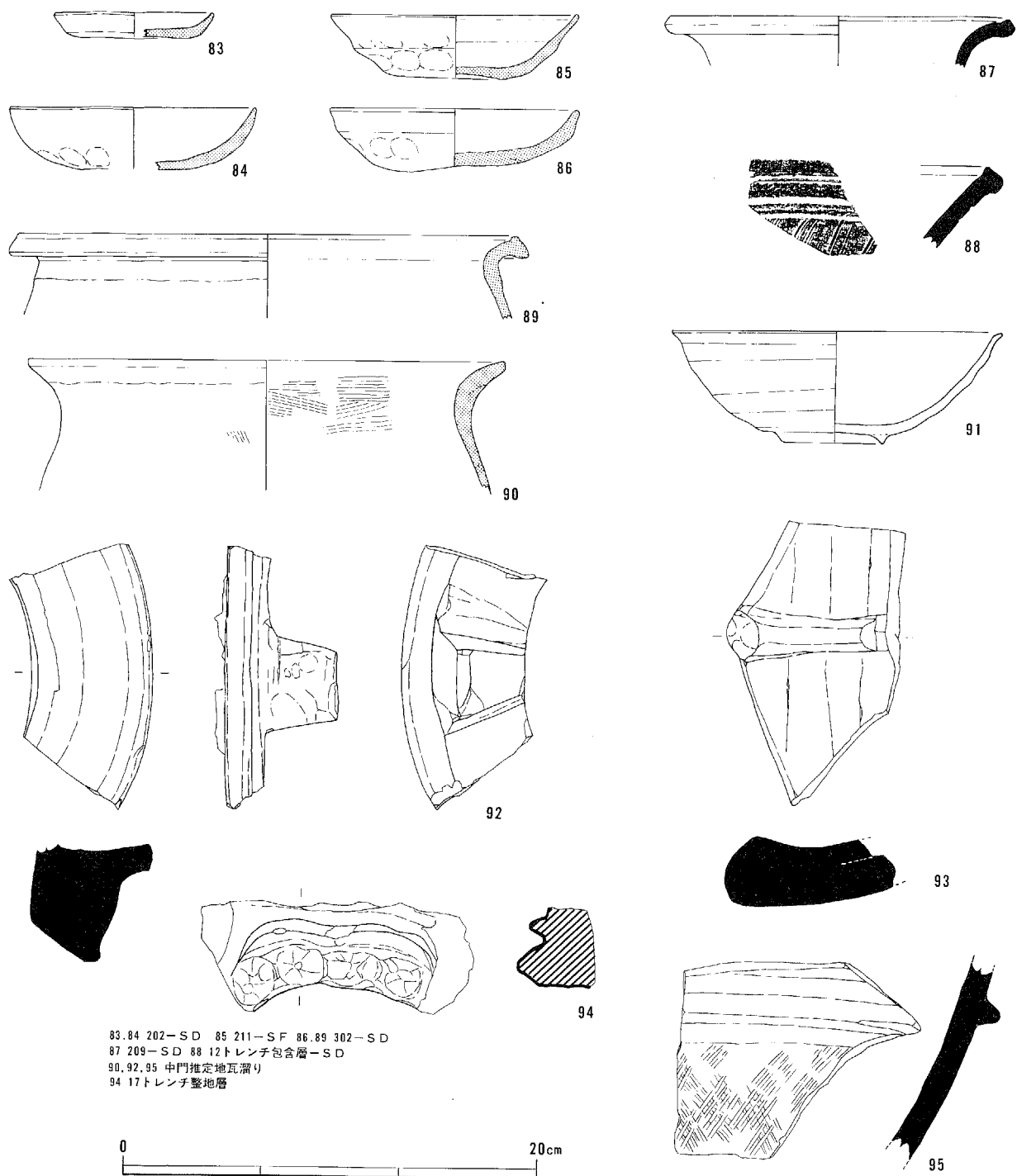
2-SD出土（81～82）土器の出土は少ない。わずかに土師器皿と須恵器甕が出土しているにすぎない。土師器皿（81）口縁径が22.0cm、器高3.4cmを測る。調整は不明確である。須恵器甕（82）はやや大型品で器面には並行タタキ、内面には同心円タタキが顕著に残る。



第30図 遺物実測図 (1)(1 / 3)



第31図 遺物実測図 (2) (1 / 3)



第32図 遺物実測図(3)(1/3)

211-S F出土 (85) は土師器皿で柱列を構成する柱穴の一つから出土している。口縁径は12cm、器高3.1cmを測る。器面には指頭痕が顕著に残る。

中門推定地瓦溜り出土 (92) は須恵質で、器種不明で4.5cmの鏝状の受け部が認められる。側面からは規則的にスカシが施されているのが観察できる。調整は非常に丁寧である。(93) は、瓦塔の破片で須恵質である。屋根の一部とみられ、下り棟が表現されている。屋根は残された破片から推測すると八角形の形状となる。

17トレンチ出土 鬼瓦の上顎の部位で瓦質を呈する。白鳳期の所産ではなく時代は下るものと考えられる。

V章 北山廃寺出土須恵器、瓦の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

元素分析による須恵器の産地推定法を開発するためには、前もって窯跡出土須恵器を分析して、どんな元素がどの様に有効に地域差を示すのかを調査研究しておかなければならない。長年にわたって、全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を示すことがわかった。

また、窯跡出土須恵器の分析データと、日本列島の基盤を構成する花崗岩類の分析データとの比較研究からK、Ca、Rb、Srは母岩を構成する主成分鉱物の長石類に由来したものと考えられる。花崗岩類の分析データを見ていると、数[※]に四方の範囲内では、同じ化学特性を持つ岩片が分布している。これと対応するように、須恵器でも数[※]に四方の領域に多数の窯があり、窯群を形成する場合、これらの窯跡から出土した須恵器群はことごとく類似した化学特性を持つことがわかった。K、Ca、Rb、Srはこのような特性を持つ因子であり、そのため、窯群間の相互識別には極めて有効であることが判明した。地域差を示す因子が常にこのような性質をもっているとは限らない。ここに長石系因子の特徴があるように思われる。このような基礎データが出てきた段階で、筆者はK、Ca、Rb、Srの4因子を使って須恵器の産地推定法を作りあげていくことを計画した。すでに、産地推定法の骨格は出来上がっており、須恵器の伝播、流通の研究が全国的に進められている。

本報告では、和歌山県下のいくつかの窯跡出土須恵器の分析データとともに、北山廃寺から出土した須恵器、瓦の分析結果についても併せて報告する。

2) 分析方法

須恵器片試料はすべて表面を研磨機で研磨したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行なった。波長分散型のスペクトロメーター（理学電気製3270型機）が使用された。この装置には48個の試料が搭載できる自動試料交換機が連結されている。48個の試料のうち、1個は必ず岩石標準試料JG-1である。JG-1は定量分析のための標準試料であるとともに、自動分析の作業が定常状態で進行したことをチェックするモニターの役目を併せもつ。分析値はJG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で表示された。標準化値と含有元素の濃度の間に直線性があることは各元素について示されているので、標準化値を%やppm濃度に変換することは容易である。しかし、

データ解析には標準化値を使用する方が簡便であるので、標準化値で分析値を示しておいた。産地推定には標準化値を使ってマハラノビスの汎距離を計算し、2群間判別分析を行なうのであるが、和歌山県の須恵器産地推定の研究はまだ試験的な段階で2群間判別分析法を適用するまでには至っていない。K-C a、R b-S r 分布図上で定性的に比較研究を行なった結果について報告する。

3) 分析結果

今回分析した試料の分析値は表-1にまとめられている。1基の窯跡からの分析試料数としては少なすぎるくらいであるが、一応これで分布図を作成してみることにした。はじめに、主成分元素であるK-C a分布図から説明する。図1～5には紀ノ川筋に分布する有ノ木窯、砂羅谷窯、奥須佐窯、西光寺窯、大將軍窯の須恵器のK-C aの分布図を示す。これらの図には一つの領域を描いてある。紀ノ川筋に沿って分布する窯出土須恵器をできるだけ多く包含するようにし、かつ、領域があまり大きくひろがらないようにして描いたものである。勿論、この領域は定量的に領界を示している訳ではないが、窯出土須恵器の化学特性の相互比較をする上には有効で、かつ、便利である。図1を見ると、有ノ木窯の須恵器はこの領域の下部に分布し、他の窯の須恵器の化学特性とは少し異なることを示している。図2の砂羅谷窯の須恵器は領域の右側に偏って分布することがわかる。図3では奥須佐窯の須恵器はこの領域の中で特に偏在することなく分布している。図4の西光寺窯の5点の試料はかなりばらついているが、一応、この領域全体に広がって分布している。図5では大將軍窯の須恵器はこの領域の下半分の領域に広がって分布している。これらの図から、描かれた領域は一応、紀ノ川筋の窯跡の須恵器が分布する領域であるといえそうである。それで、紀ノ川筋領域としておく。図6には有田川筋にある土生池窯跡の須恵器のK-C aの分布図を示してある。よくまとまって分布しており、Ca量が少ないという特徴があることがわかる。さらに注目すべき点は紀ノ川筋領域を全くずれて分布しており、紀ノ川筋に分布する窯の須恵器とは化学特性が異なることがわかる。図7には、海南市の内池窯の須恵器のK-C a分布図を示す。大部分のものは紀ノ川流域の右側にずれて分布し、紀ノ川筋や有田川筋の窯跡出土須恵器とは化学特性が異なることを示している。土生池窯を除いて、今回分析した試料はかなりばらつく。このようなことは他地域ではあまり見られない点である。それで、試料胎土を点検してみると、白色粗粒が含まれていることが多く、もしかしたら、ばらつきの原因はこの粗粒のせいかもしれない。この粗粒は混和剤なのか、それとも、粗粒を含んだままの粘土を素材として須恵器を製作したのか、目下のところ不明である。

次に、R b-S r 分布図を見てみよう。図8～12には紀ノ川筋に分布する窯の須恵器のR b-S r 分布図を示してある。ここでも、K-C a分布図と同様にして紀ノ川筋領域を描いてある。

表 分析値

			K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
土生池2号窯	8-904	80	0.477	0.072	2.62	0.486	0.447	0.328
	905	79	0.423	0.058	2.53	0.493	0.406	0.355
	906	赤色	0.417	0.051	3.16	0.366	0.326	0.248
土生池3号窯	8-907	151	0.566	0.078	2.39	0.604	0.392	0.260
	908	262	0.378	0.051	2.14	0.451	0.376	0.285
	909	238	0.384	0.034	2.18	0.423	0.329	0.167
土生池3号窯	910		0.455	0.047	2.79	0.536	0.364	0.343
	8-911	128	0.387	0.057	2.32	0.539	0.351	0.238
	912		0.405	0.082	2.66	0.427	0.335	0.225
有ノ木窯	8-913		0.278	0.067	2.18	0.367	0.216	0.197
	914		0.298	0.191	2.67	0.382	0.270	0.234
	915		0.292	0.066	2.21	0.368	0.175	0.177
	916		0.319	0.291	2.48	0.416	0.451	0.363
	917		0.311	0.474	3.15	0.498	0.349	0.334
	8-918		0.408	0.293	4.19	0.411	0.197	0.270
砂羅谷窯	919		0.347	0.372	3.13	0.370	0.249	0.369
	920		0.417	0.514	4.07	0.401	0.260	0.324
	921		0.382	0.398	3.64	0.383	0.299	0.350
	922		0.394	0.267	3.83	0.410	0.186	0.239
	8-923		0.349	0.074	2.98	0.531	0.176	0.134
	924		0.509	0.226	1.43	0.841	0.519	0.243
奥須佐窯	925		0.404	0.252	2.46	0.611	0.429	0.226
	926		0.360	0.259	2.23	0.482	0.470	0.238
	927		0.344	0.170	2.59	0.401	0.256	0.167
	928		0.408	0.230	1.76	0.618	0.439	0.265
	929		0.379	0.375	2.03	0.554	0.718	0.222
	930		0.489	0.290	1.64	0.729	0.556	0.270
	931		0.358	0.236	2.17	0.500	0.373	0.225
	932		0.390	0.175	2.05	0.557	0.218	0.271
	8-933		0.261	0.067	2.35	0.350	0.171	0.117
大將軍窯 紀ノ用	934		0.432	0.111	2.26	0.607	0.220	0.198
	935		0.370	0.129	2.30	0.440	0.365	0.325
	936		0.327	0.450	3.02	0.438	0.345	0.345
	937		0.367	0.146	2.30	0.452	0.291	0.230
	938		0.380	0.339	2.36	0.539	0.313	0.283
西光寺窯 紀ノ用	8-939		0.280	0.127	2.47	0.390	0.258	0.271
	940		0.494	0.178	1.57	0.772	0.412	0.272
	941		0.445	0.432	1.98	0.733	0.818	0.275
	942		0.513	0.288	2.07	0.695	0.427	0.319
	943		0.439	0.377	2.75	0.567	0.513	0.329
	8-944		0.385	0.267	2.21	0.545	0.280	0.272
吉里窯 紀ノ用	945		0.370	0.230	2.08	0.483	0.354	0.272
	8-946	須	0.490	0.054	1.87	0.705	0.139	0.109
	947		0.520	0.047	2.16	0.750	0.143	0.086
	948		0.428	0.099	3.41	0.552	0.154	0.153
	949		0.465	0.095	2.80	0.544	0.156	0.197
	950		0.430	0.163	2.05	0.654	0.260	0.246
	951		0.585	0.066	1.92	0.760	0.149	0.169
	952		0.471	0.068	2.63	0.638	0.246	0.249
	953		0.355	0.132	3.47	0.505	0.326	0.165
	954		0.509	0.168	3.49	0.610	0.178	0.176
	955		0.414	0.071	2.49	0.569	0.168	0.160
	951		0.416	0.181	3.44	0.460	0.189	0.176
北山庵寺 瓦(格子)	8-957		0.459	0.257	2.95	0.521	0.302	0.193
	958		0.440	0.254	2.70	0.547	0.250	0.167
	959		0.477	0.237	2.63	0.677	0.314	0.267
	960		0.373	0.327	2.17	0.403	0.304	0.223
	961		0.471	0.247	2.87	0.658	0.290	0.289
	962		0.410	0.158	2.61	0.574	0.227	0.238
	963		0.485	0.246	2.42	0.554	0.303	0.172
	964		0.473	0.319	2.76	0.594	0.292	0.195
	965		0.460	0.161	2.82	0.753	0.225	0.136
	966		0.453	0.295	2.29	0.505	0.302	0.170
	8-967	瓦(縦目)	0.498	0.156	2.89	0.569	0.209	0.227
	968		0.511	0.204	3.15	0.455	0.24	0.161
	969		0.478	0.239	2.72	0.630	0.290	0.243
	970		0.487	0.249	2.68	0.656	0.277	0.353
	971		0.481	0.166	3.39	0.539	0.217	0.204
	972		0.437	0.165	2.83	0.533	0.232	0.288
	973		0.514	0.255	2.70	0.678	0.297	0.310
	974		0.466	0.238	2.93	0.621	0.284	0.227
	975		0.490	0.151	3.21	0.548	0.230	0.199
	976		0.455	0.234	3.18	0.476	0.243	0.252
	977		0.359	0.152	4.56	0.371	0.198	0.172
内池窯	8-978		0.277	0.470	3.11	0.345	0.246	0.214
	979		0.335	0.458	2.94	0.351	0.265	0.226
	980		0.270	0.658	3.01	0.345	0.324	0.283
	981		0.314	0.362	3.03	0.367	0.249	0.194
	982		0.288	0.486	3.82	0.378	0.276	0.239
	983		0.439	0.099	2.53	0.493	0.292	0.294
	984		0.265	0.622	3.31	0.315	0.306	0.276
	985		0.498	0.248	3.26	0.525	0.228	0.358

この領域内での偏在から、各窯跡出土須恵器の化学特性を比較してみた。図8、9より、有ノ木窯、砂羅谷窯の須恵器は紀ノ川筋領域の下部分に偏在する。これに対して、図10、11の奥須佐窯の一部の須恵器と、吉里窯の須恵器はこの領域内に分布するが、奥須佐窯と西光寺窯の須恵器の大部分は大きくずれて分布した。胎土中に含まれている白色粗粒に起因するものと思われる。このように胎土中の夾雑物の存在は窯出土須恵器の化学特性を乱すので、分析の際には注意を要する。図12には大將軍窯の須恵器のRb-Sr分布図を示すが、紀ノ川筋領域内に分布することがわかる。

以上のことから、Rb-Sr分布図でも、一応、紀ノ川筋領域が描かれることがわかる。本来、この作業は一基の窯あたり、50~100点程度の試料を分析して領域を描くのであるが、少数ながらも、今回は紀ノ川領域が描けることがわかった。図13には有田川筋の土生池窯群の須恵器のRb-Sr分布図を示す。土生池窯群の須恵器はRb-Sr分布図でもよくまとまって分布しており、紀ノ川領域の右端に分布し、紀ノ川筋の窯跡出土須恵器とは化学特性が若干異なることがわかる。以上のことから、

図1 有ノ木窯出土須恵器のK-Ca分布図

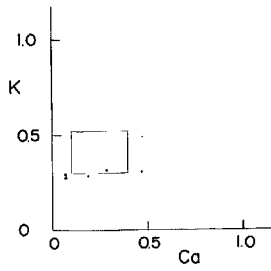


図2 砂羅谷窯出土須恵器のK-Ca分布図

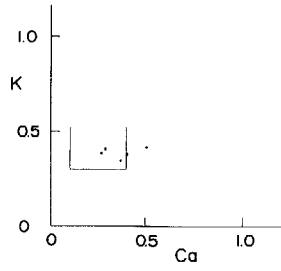


図3 奥須佐窯出土須恵器のK-Ca分布図

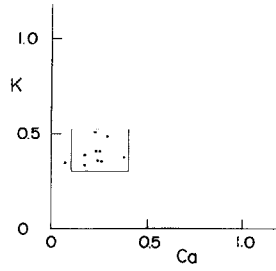


図4 西光寺窯出土須恵器のK-Ca分布図

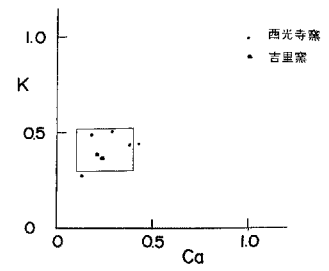


図5 大將軍窯出土須恵器のK-Ca分布図

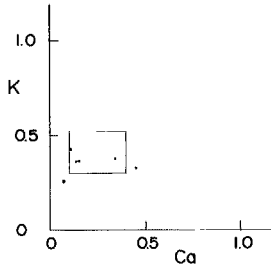


図6 土生池窯出土須恵器のK-Ca分布図

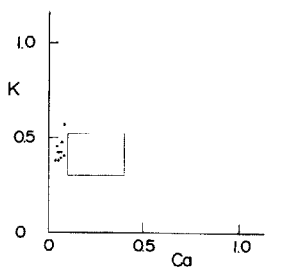


図7 内池窯出土須恵器のK-Ca分布図

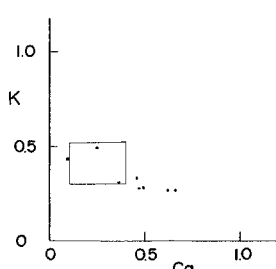


図8 有ノ木窯出土須恵器のRb-Sr分布図

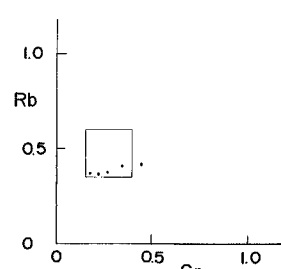


図9 砂羅谷窯出土須恵器のRb-Sr分布図

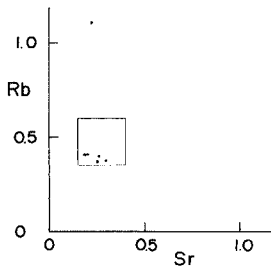


図10 奥須佐窯出土須恵器のRb-Sr分布図

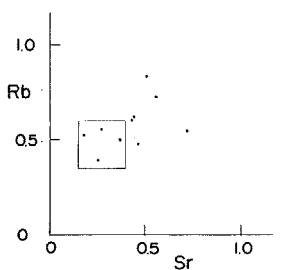


図11 西光寺窯出土須恵器のRb-Sr分布図

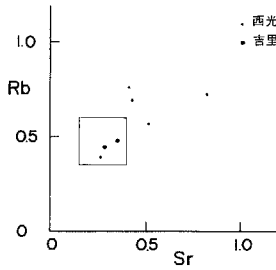


図12 大將軍窯出土須恵器のRb-Sr分布図

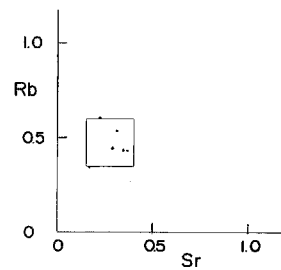


図13 土生池窯出土須恵器のRb-Sr分布図

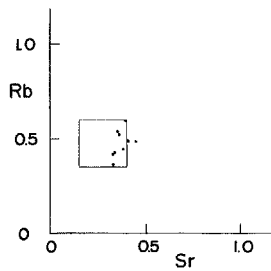


図14 内池窯出土須恵器のRb-Sr分布図

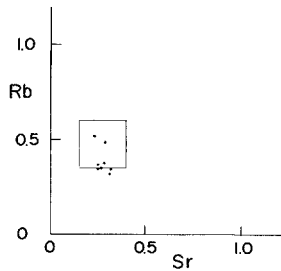


図15 北山鹿寺出土瓦、須恵器のK-Ca分布図

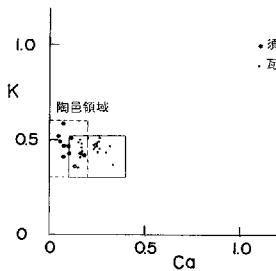
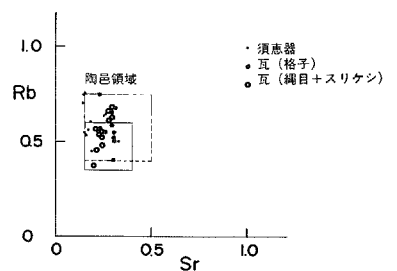


図16 北山鹿寺出土瓦、須恵器のRb-Sr分布図



紀ノ川筋と有田川筋出土須恵器の化学特性には若干の相違があることがわかったが、今後、さらに多くの窯出土須恵器を分析し、このことを確証していきたい。それが、和歌山県内の遺跡出土須恵器の産地推定に大いに役立つものと思われる。図14には海南市の内池窯の須恵器のRb-Sr分布図を示してある。紀ノ川筋領域の下部に偏在し、化学特性が若干異なることを示している。上述してきたように、和歌山県内の窯跡出土須恵器の化学特性にも地域によって微妙に異なることが判明した。今後、この点をさらに明確にすることによって、県内の須恵器の生産と供給の関係が明らかにされるものと期待される。さらに紀ノ川筋の窯跡出土須恵器には白色粗粒が多く、これが混和剤なのか、それとも、もともと粘土内に含まれていた粗粒なのかについての検討も

必要であり、この点で十分な胎土観察のデータも必要となろう。

次に、遺跡出土須恵器、瓦の分析データについて説明する。その遺跡は北山廃寺である。主成分元素のK-Ca分布図を図15に示す。須恵器、瓦はそれぞれまとまって分布する。したがって、それぞれ同一産地で作られた可能性を持つ。瓦は格子文様、縄目文様の瓦とも紀ノ川領域に分布することが注目される。これに対して、須恵器はすべて陶邑領域に分布することも注目される。微量元素のRb-Sr分布図は図16に示してある。この図では格子模様の瓦と縄目文様の瓦を区別してプロットしてあるが、両者の間には特に化学特性の違いは認められない。胎土は同一と推察される。つまり、同じ産地で作られた瓦である。そして、その多くはこの分布図でも紀ノ川筋領域に分布する。これらのことから、瓦は紀ノ川筋のどこかで作られた地元産の製品であろう。須恵器はこの図でも瓦とは少しずれるが陶邑には分布した。図15、16より須恵器と瓦の胎土が異なること、したがって、産地は別であることが判明した。瓦の方は両図においてほぼ紀ノ川筋領域に対応するのに対し、須恵器の方は陶邑領域に対応することがわかった。須恵器は陶邑からの搬入品である可能性が出てきた訳である。6、7世紀代の地方窯産の須恵器の伝播についてはまだ、十分に解明されている訳ではないが、これまでのデータを見るかぎり、窯周辺の遺跡にしか供給されていない。むしろ、陶邑産の須恵器が広域にわたって供給されている。この点を考慮にいと、紀州の北山廃寺に陶邑産の須恵器が供給されていた可能性はある訳である。土器形式からもチェックする必要があるとともに、和歌山県内の6、7世紀の遺跡から出土する須恵器の分析データを今後とも集積する必要がある。ここでは今回分析した北山廃寺の須恵器は陶邑産の可能性があるとしておく。

第VI章 まとめ

伽藍配置 これまでの調査結果から、北山廃寺は奈良県明日香所在の坂田寺の系統の瓦を有する寺院であり、検出された瓦溜まりがすべて南北に一直線にならぶことから四天王寺式の伽藍配置と考えることが妥当と考えられる。

建立時期 軒平瓦が存在しないという古い要素を持っていることと、塔心礎が現位置を保っており半地下式の古い形式であること、出土した瓦類、土器類の検討から北山廃寺の創建時期は7世紀中頃を大きく下らない時期と考えられ、全国的にみてもかなり早い段階で建立された寺院といえる。那賀郡内に所在する寺院は瓦のモチーフから見た場合、西国分廃寺出土の軒瓦A類が先行すると見られ、西国分廃寺が3寺（西国分廃寺、最上廃寺、北山廃寺）の中では最も古く建立されたと考えられる。出土する須恵器からも他の2寺よりも先行する形式であることから符号する。一方、最上廃寺B類と北山廃寺A類は同范と見られる。この軒瓦は最上廃寺では出土量が最上廃寺A類に比べて量的に少ないことから差し替え用の瓦と考えられ、反して、北山廃寺ではこのB類がその主流であることを考えると、最上廃寺が先行する寺院である可能性は高い。したがって、西国分廃寺→最上廃寺→北山廃寺の順に建立されたと考えるのが妥当であり、かつて考察した造寺活動は西国分廃寺→最上廃寺→北山廃寺の順であろうことに修正は要しないであろう。ただ、出土する須恵器からは年代幅はさほどなく、短期間に造寺が行なわれた可能性は高い。

北山廃寺の存続期間については、難波宮系の軒瓦の存在、鎌倉以降と見られる巴文瓦等の存在、更に、遺構のなかには溝、柱跡、掘立柱列、土壙墓等中世の遺構が以外に多いことから、意識として連綿と引き継がれてきた結果であろうと推察される。これは、伊都郡かつらぎ町所在の佐野廃寺（日本霊異記にみえる狭屋寺）においても中世に遺構群が存在していることと同様の現象であるが、それらはいずれも創建当時を凌駕するものではなかったと見られる。

寺域 塔心礎を起点として、西54mの地点に東西に延びる溝を検出している。溝の延長線上には里道として現在に踏襲されており、おそらく西限を示す遺構と考えて差しつかえないと考えられる。東限は東75mの位置で現三島池と落ち込む傾斜を検出している。南限は門の位置が明らかでないため推定の域はでないが、塔心礎の西への延長線上と溝の交点から溝の延長上約33mの地点は約4mの段差がありおそらくこの段差が南の限りとなるものと推察される。したがって南北の寺域は108mとなりほぼ1町となる。東の溝は検出できなかったが塔から東は約110m程度の占地が可能なことと、「額安寺班田図」等に見られるように東には雑舎などが配置されるため西側より東側の空間が広いことなどを考慮にいれると1町半の規模を有していると考えるのが妥当であろう。

遺物 瓦 須恵器の胎土分析の結果から瓦はタイプに関係なく地元で焼かれたものであることが確

認められた。しかしながら須恵器については、陶邑産の須恵器である可能性が指摘されている。この時期近隣の和歌山市山東地区周辺に当該期の窯跡群が存在しているにも関わらず、陶邑の製品が搬入されているのはなにか示唆的である。紀伊のすべての白鳳寺院が北山廃寺と同じ傾向であるか否かは非常に興味をおぼえるが、将来の課題としておきたい。

瓦塔については「その始源については奈良時代中期以後に始まり、平安時代の最盛期を経て鎌倉室町時代まで」といわれる遺物であり、北山例はその出土状況が難波宮系の重圈文軒丸瓦と同じ瓦溜まりから出土していることからして瓦塔の時期としては早い時期に比定することができよう。一方、この有心の重圈文軒丸瓦は藤澤一夫氏の編年によると第四期類重圈文軒丸瓦に分類され、この瓦は「平城宮をはじめ平城宮の諸寺跡に多くみられる」ことや国衙、郡衙から出土することが指摘されていることから当初氏寺として造営された北山廃寺がある時期から役所的色合いが強くなったことも示すものと考えられる。

参考文献

- 『山田寺展』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録第8冊1977
- 森郁夫「上野廃寺の調査」『仏教芸術』142号1982
- 『渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録第10冊1983
- 舘磨正信・岩鶴敏治「北山廃寺」『貴志川町史』第3巻史料編2 1981
- 『最上廃寺発掘長き報告書』和歌山県教育委員会1983
- 「南海道・大和街道他」『歴史の道調査報告書』(II) 和歌山県教育委員会1980
- 稲垣晋也「古代の瓦」『日本の美術』66 1971
- 石田茂作監修「寺院」『新版仏教考古学講座』第2巻1975
- 石田茂作監修「塔・塔婆」『新版仏教考古学講座』第3巻1976
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 奈良国立文化財研究所学報第31冊1978
- 古代の土器研究会『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東－』古代の土器研究会
第1回シンポジウム1992
- 古代の土器研究会『古代の土器1 都城の土器集成』1992
- 『和歌山の地名』平凡社 1983
- 中尾芳治「重圈文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」『難波宮跡研究調査年報1971』
難波宮址顕彰会1972
- 拙稿『最上廃寺』和歌山県教育委員会1981
- 貴志川町教育委員会「古代・中世」『貴志川町史』第1巻通史編1988
- 藤井保夫「紀伊の白鳳寺院における川原寺式、巨勢寺式軒瓦の採用について」『古代』
第97号1994 早稲田大学考古学会

写真図版



北山廃寺全景（北から）



塔基壇の調査（南から）



塔心礎検出状況（西から）



塔跡北側基壇縁の状況



金堂南側基壇縁検出状況

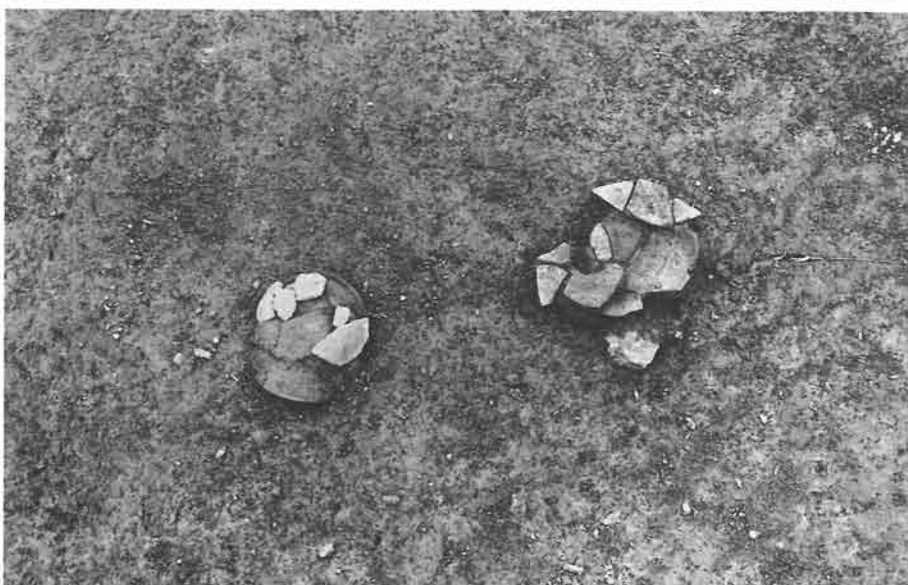


講堂跡、坊舎地区の調査状況
(南から)

講堂北側溝 (18-SD)
検出状況



同。遺物検出状況



同。土層断面





回廊北西隅検出状況（南から）



同。北から



西側回廊推定地の調査
（東から）

西側回廊推定部の調査（南から）



中門推定地瓦溜り
検出状況（東から）



中門推定地瓦溜り
検出状況（北から）





中門推定地（東から）



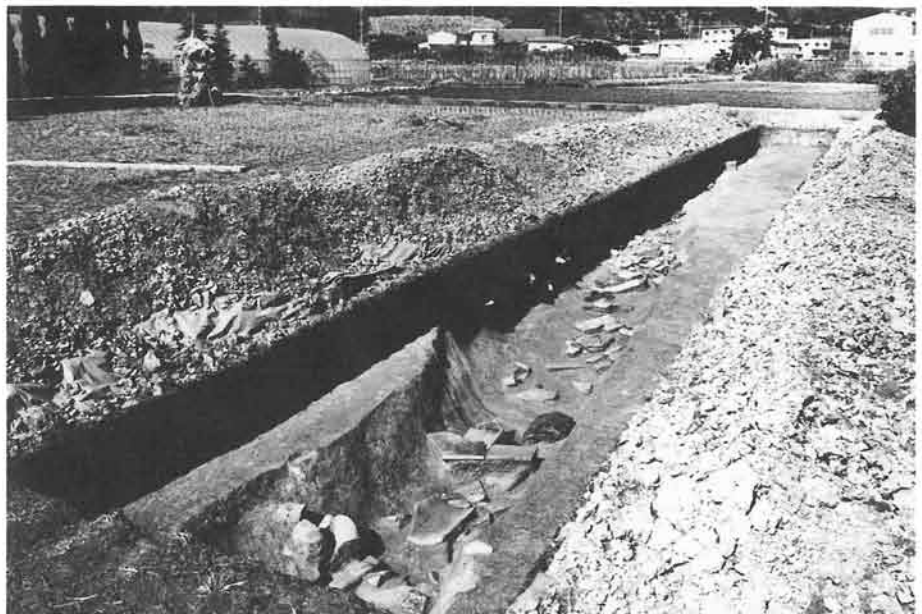
中門推定地掘立柱列
(201-S F) 検出状況



中門東側 (302-S D)



西側回廊検出状況（南から）



同．瓦検出状況（南から）



西側回廊検出状況（南から）



回廊検出状況



西側回廊瓦検出状況（西から）



同。（東から）

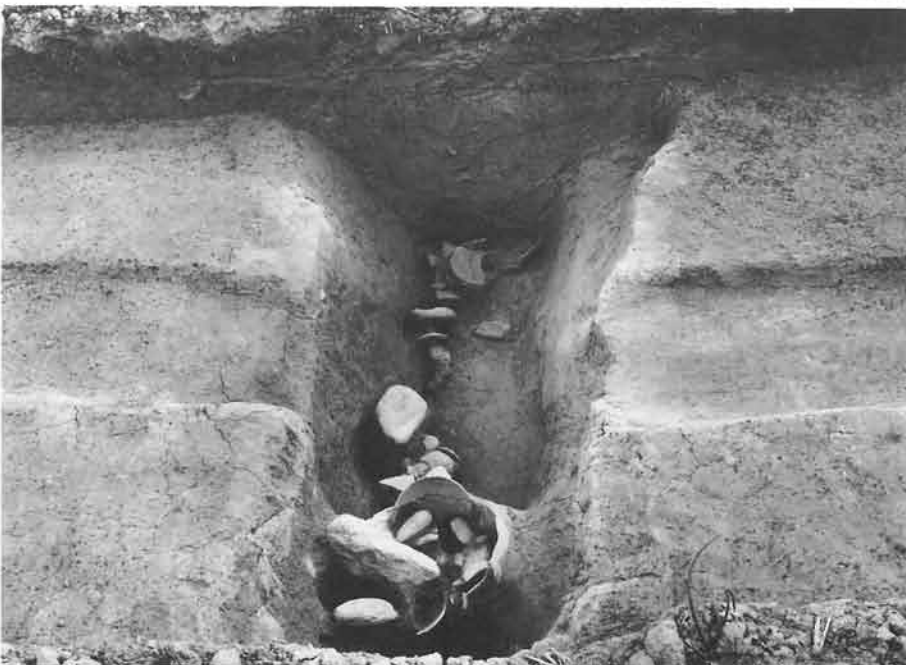
西側回廊南西隅検出状況
(南から)

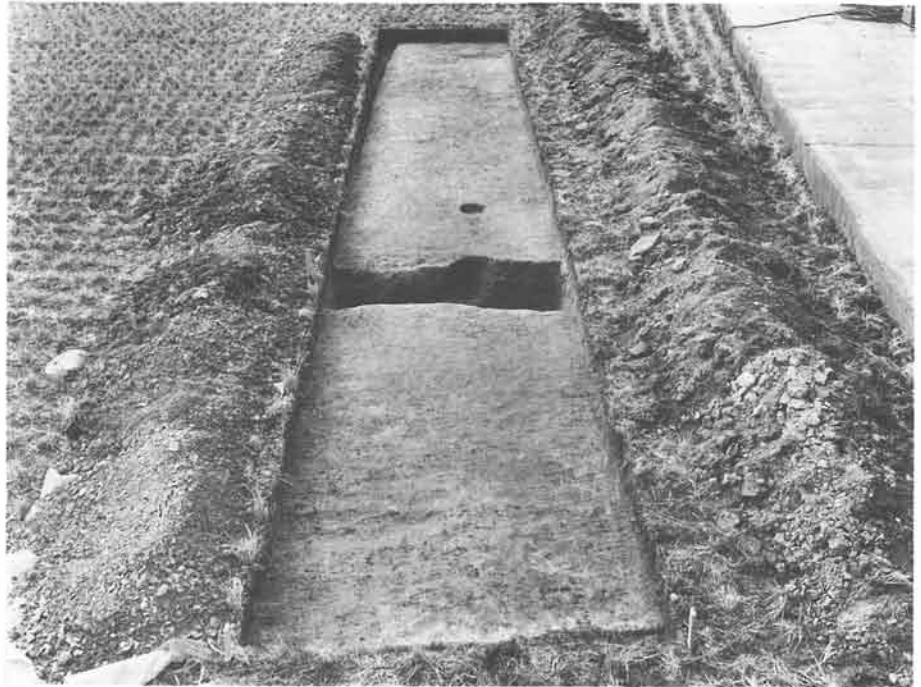


西限の溝 (5-S D)

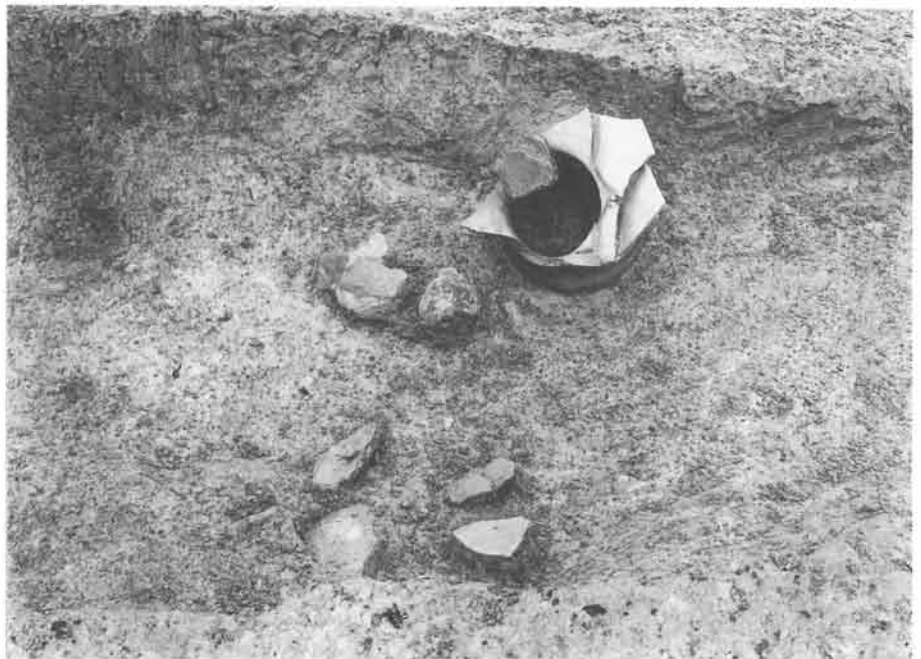


西限の溝 (5-S D)
遺物出土状況 (南から)





西限の溝（5－SD）
検出状況



西限の溝（5－SD）
遺物出土状態



西限の溝（5－SD）
検出状況



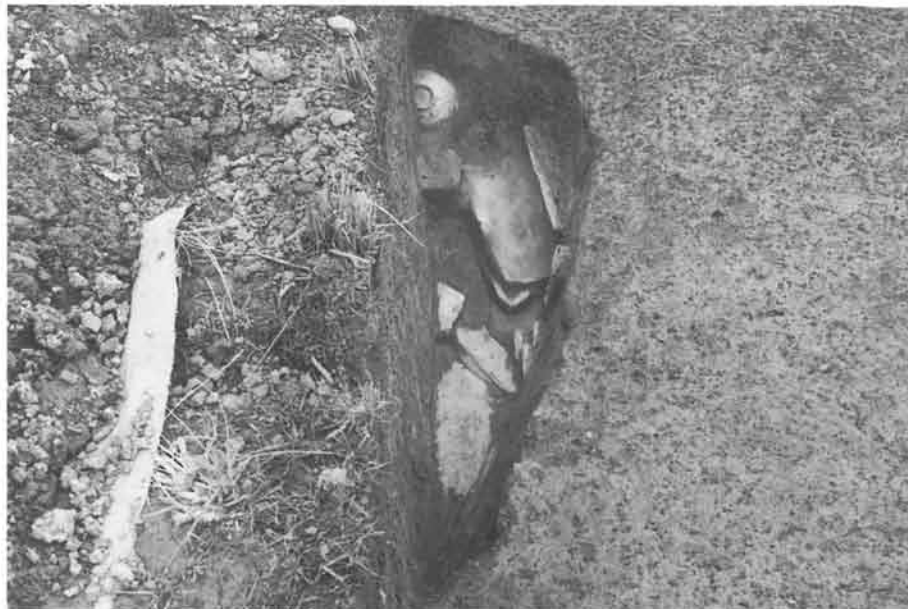
第12トレンチ遺構検出状況



第12トレンチ213-S B



第15トレンチ212-S B



第3トレンチ3-SX中世墓



第31トレンチ中世柱跡群



第 調査区中世遺構群



1



2



3



7



5



11



14



15



16



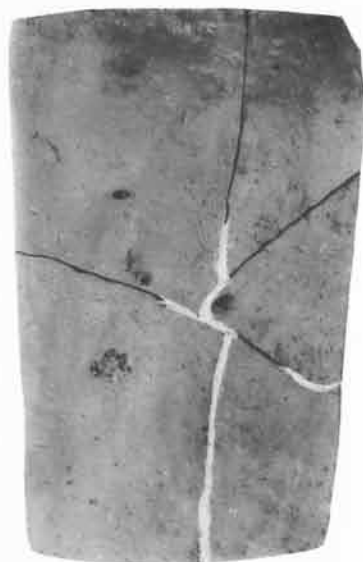
17



18



20



21



23



24



38



41



42



12



46



48



47



59



50



62



60



66



65



67



93



68



69



73



92



80

報告書抄録

ふりがな	きたやまはいじはつつちょうさほうこくしょ						
書名	北山廃寺発掘調査報告書						
副書名							
編著者名	富加見 泰彦						
編集機関	(財)和歌山県文化財センター						
所在地	〒640 和歌山市広道20番地 TEL0734-33-3843						
発行年月日	1996年3月25日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経 ° ' " ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
きたやまはいじ 北山廃寺	わかやまけんながぐん 和歌山県那賀郡 きしがわちょうきたやま 貴志川町北山	3032590	27	34°13'44"	1994.12	990m ²	重要遺跡 範囲確認 調査
				東 経			
				135°19'12"	1996.3		
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項	
北山廃寺	寺院跡	奈良時代 鎌倉時代	塔 跡 回 廊	坂田寺系軒瓦 瓦 塔		四天王寺式 伽藍配置？	

北山廃寺発掘調査報告書

1996. 3. 25

編集 (財) 和歌山県文化財センター

和歌山市広道20番地 TEL 0734(33)3843

発行 貴志川町教育委員会

那賀郡貴志川町長原 TEL 0736(64)2273

印刷 西岡総合印刷株式会社